
極道と暴走族

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極道と暴走族

【Nコード】

N4030Y

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

実は極道の義娘な夜月美羽と、実は暴走族総長な和泉聖夜の二人の恋愛物語。 あんま極道とか暴走族とか関係ないといえなくもない。唯友人たちの悩み等を解決しているだけと言えなくもない。だがまあ、恋愛はちゃんとしているといえなくもない。とにかく、いろいろとシリアスなんです（笑）

登場人物（前書き）

ネタバレが多大に含まれます

登場人物

○夜月美羽やづき みづ

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

黒の髪と瞳の美少女。髪は腰のあたりまで伸ばしてあり、サラサラのストレート。

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群で喧嘩もめちゃくちゃ強い。

5歳の時に夜月組の現組長に拾われた。そのことは組の皆や信頼できる人たち以外には秘密。
ある人を探している。

○和泉聖夜いずみ せいや

17歳 鬼瀧学園 2年生

銀の髪と青い瞳の美青年。髪は首のあたりまで、所々はねている。暴走族、神龍しんりゅうの総長。そのことは親には秘密。本当は和泉グループという大企業のトップの息子。

表では優しい紳士だが、裏は結構鬼畜で好きな人ほど虐めなくなる性格。

実は美羽が探していた人で、昔は金髪だった。

○永瀬樹ながせたつき

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

美羽の親友。

明るい茶髪でブラウンの瞳。ショートヘアの美人さん。

意外に涙もろく、感動ものに弱い。怖いもの知らず。クラス委員で皆のリーダー的存在。

美羽の家庭事情などはだいたい知っているが、気にせず付き合っている。

○夜月海斗 やづき かいと

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

赤がかった黒髪に紅色の瞳。

格好よいのでモテるけど、冷たくあしらう。

夜月組の若頭。

美羽を溺愛している。樹とは喧嘩ばかりしている。聖夜の事も嫌いで、会えば嫌味ばかり言っている。

○佐伯空 さえき そら

17歳

美羽の双子の兄。

今は若狭と一緒に外国に住んでいる。

美羽のことを憎んでいる。

髪色はこげ茶で、右側の前らへんの髪だけ少し長めにしてあるけど、後は短め。瞳の色は茶色っぽい黒。

○間江千歳 まゑ ちとせ

17歳 鬼瀧学園 2年生

神龍の副総長。

黒髪に青のメッシュで、青のカラコンをしている。

無愛想で無口。

神流の皆（特に幹部）のことは信頼している。

○宝樹渚 たからぎ なぎさ

16歳 鬼瀧学園 1年生

神龍の幹部。

オレンジの髪に茶色の瞳。

幹部の中で最年少。
甘えたがりでわがまま。
頭は悪いが、喧嘩は強い。

○谷城瑛太 やしろ えいた

18歳 鬼瀧学園 3年生
神龍の幹部。

こげ茶色の髪に、紫色のメッシュ。瞳には紫のカラコン。
幹部の中で最年長。
明るい性格。

○乱場葉月 らんば はづき

17歳 鬼瀧学園 2年生
神龍の幹部。

金髪にピンクのメッシュが少し。瞳の色はオレンジっぽい感じ。
頭の良さは平均くらい。
実は神龍一番の行動派。
女たらし。

○夜月剛 ちづき じょう

37歳
灰色の髪に黒の瞳。顔や体にはたくさんの傷がある。

夜月組の組長。若頭時代（25歳のとき）に美羽を拾った。
厳しい事ばかり言うが、それは心配だから。

○和泉拓 いずみ たく

38歳
聖夜の父。黒髪のオールバック。
剛の友達。和泉グループのトップ。

○佐伯菜穂 さえき なほ

美羽の母親。

肩までの長さの明るい茶髪に、茶色がかった黒色の瞳。
今はもう生きていない。美羽が5歳の時に死んだ。

○佐伯若狭 さえき わかさ

42歳

美羽の父親。

こげ茶色の落ち着いた雰囲気髪型に、それと同じ色の瞳。
今は外国に住んでいる。

菜穂とは仲良し夫婦だった。

美羽とは、親子の縁を切つてある。

○黒川頼人 くろかわよりひと

42歳

菜穂と若狭の高校生時代の同級生。

美羽の本当の父親。

事件の日から行方は不明。

美羽と同じくさらさらの黒髪に黒の瞳。

登場人物（後書き）

いろいろいますが、基本でてくるのはメイン二人と樹、海斗ぐらい
かもしれません。

最初は自己紹介

『お前が殺したんだろ!!』
ちがう

毎日が地獄だった

『人殺し!!』
やめてっ

生きていることさえどうでもよくなってきた・・・

『お前なんかいなくなればいい』
いや・・・聞きたくない・・・

自殺しようとしても怖くてできなくて、そんな自分が情けなく思えてきて・・・。私は、自分という存在が一番嫌いだった。
でも・・・、

『・・・大丈夫?』

光が見えたんだ。私には眩しすぎるくらいの光。みっともないくらいに縋ってしまった。

『また会おうね』

そういつて微笑んだあなたの顔が脳裏に焼きついて離れない。

また、会えるかな

会いたくて 会いたくて。

その思いだけが、私を支えてくれていた……。

「美羽！おはよっ！！」

「おはよ。」

あたしは夜月美羽^{やづき みづ}。ここ、城ヶ崎学園^{じょうがさき}の高等部の2年生。この学園は、お金のある人が頭のいい人しか入れないんだ。中部と高等部があつて、中部から入った人は優先して高等部に入れる。だからほとんどの人が中学時代からの付き合い。

ちなみに、さっきあたしに挨拶してきたのは、あたしの親友の永瀬^{ながせ}ちなみに、さつきあたしに挨拶してきたのは、あたしの親友の永瀬^{ながせ}樹^{たつき}。

茶色の髪と瞳をしていて、ショートヘアーの美人さん。

「今日だね、テスト発表。」

「えっ……そうだった？」

「そうだよ！……また忘れてたの？」

「……………うん、まあ……………」

どうやら今日は先週やったテストの結果発表があるらしい。

テスト結果は、生徒玄関の掲示板に上位100まで貼り出されるんだ。

正直言つてあたしは興味ないんだよね……。だいたい、そんなのわざわざ大々的に発表しなくてもよくね？って思っただけど、こう思っているのはあたしだけじゃないはず！

おっと……。そんなことを思っているうちに、掲示板までたどり着いたみたいだ。

「美羽！速く！！」

掲示板の前には、たくさんの生徒達。因みに私は人ごみが苦手。すぐに酔ってしまうから。でもまあ樹が呼んでいるので、仕方なく人を掻き分けて掲示板の前へ。

「やっときた！ほら見て！」

……。あつ。

「すごいじゃん！また1位だよ！羨ましい〜。」

「ホントだ……。よかったあ。」

「美羽！テンション低すぎ！！」

いや、樹がテンション高すぎなだけだと思うけど……。どういうわけか、あたしはありとあらゆるテストで、中等部の頃から1位を譲ったことがなかった。結構簡単な問題ばかりだったんだけど。

……。って、これじゃほかの人が聞いたら嫌味だな。やめておこう。

「ほんと、美羽はいいよねえ。頭も良くて運動神経も抜群で。」

「そんなことないって。樹だつてすごいじゃん。いつも5位以内には入ってるし、運動神経だっていいし……。フアンクラブまであるしね。」

そう・・・樹には中等部・高等部あわせて数え切れないほどのファンがいる。性格だって良いし・・・何よりモデル並みにきれいだから。なんたってあたしの自慢の親友だからね。よからぬ事を考えている男子から、あたしが護ってあげなきゃ。まあこの学校は素行はいい人ばかりなはずだから、あんまりそんな事件はないと思うけど。というかないけど。

「そんなこと言ったら美羽なんて「よっ！美羽！！」

ぎゅうー！！

「うわっ！！」

「ちよつと海斗！美羽から離れてよ！」

「うるせえよ！俺の美羽に近づくんじゃねえ！」

そのまま2人は喧嘩を始めてしまった。どうでもいいからあたしを巻き込まないでほしいんだけど。

っていうか、さっきから海斗にまわされた腕がしまっていて・・・。

く・・・・・・苦しい！！死ぬ！！！！

「かつ、海斗！くるしつ・・・離して！！！！」

「えっ？あ、ごめん！」

はあっ・・・はあっ・・・

し、死ぬかと思った・・・。

こいつは夜月海斗^{やづきかいと}。赤がかった黒髪に紅色の瞳で、（見た目だけはカッコイイからめちゃくちゃモデルし、告白だって1週間に一回は必ずある・・・全部振ってるらしいけど。そしてあたしと名字が一

緒な事に気づいた人もいると思うけど、海斗はあたしの義理の兄弟。あたしは5歳の時海斗の父親に拾われた・・・まあ、この話は後々・・・長くなりそうだし。

なぜか、樹と海斗は気が合わないらしく、いつも喧嘩ばかり・・・。

まあ、いつか・・・喧嘩するほど仲が良くなってよく言っし。ん？これって逆に気が合ってるんじゃない？・・・なんて言って二人に猛烈に怒られたことがあるからそれは言わない。

「美羽、大丈夫？」

「ほんつとごめん！俺、気づかなくて・・・。」

「いや・・・大丈夫だから。気にしないで良いよ。」

ここで許さなかったら、今日一日中許されるまでごめんって言って付きまとわれるのがおちだ。それはさすがに嫌。はっきり言うとうざい上に面倒。そんなこんなで、あたしたちは教室へと歩を進めた。

（in教室）

「夜月さん！また1位だったね！さすがー！！」

「い・・・いや、そんなことないっで。」

「夜月！この問題なんだけど、わかんないから教えてくれる？」

「う、うん。いいよ。」

「あっ！！私も！」

「わかった。・・・えつと、一人ずつでお願いします・・・。」

教室に入ったとたん、クラスメイトに囲まれました。席にたどり着くのが大変だった・・・まあ、これはいつものことなんだけど。

毎度この女子の迫力には驚かされるばかりで……。皆、成績上げるのに必死なんだなっと思う。

そんな人たちのためにも、心の奥底では面倒だと思いつつもあたしは丁寧に教えていく。あたし説明とかするの苦手なんだけど……みんなあたしの説明で納得してくれるからすごい。尊敬するよ。

ちなみに、この学園はA→Eクラスまであつて、あたしはC組なんだ。樹と海斗も一緒。

樹は教室入ったとたん、樹ファンクラブの方々にかこまれた。これいつもの光景だからもはやだれも何も言わない。一種の日常だ。海斗は誰も近寄るなオーラを出しながら、自分の席についた。これもいつもの事。ただこれには未だになれずに怯えてる人もいるけど、ついでに、海斗はあたしの前の席で、あたしの隣が樹。あたしは、後ろから2番目の一番窓側。こここの席が一番落ち着くんだよ。

今はって言うかいつもそれどころじゃないけど……。

こうしてあたしの学園生活は過ぎていく。

夜月組

「夜月さん！さようなら！！」

「うん。さようなら。」

やっと長い長い授業が終わった。今日は樹は学級委員の仕事で、遅くなるらしいから海斗と家に帰ることにした。学園の門の前では何台かの車が停まっていた。恐らく、お金持ち達の手車だろう。見るからに高級そうなものばかり・・・私的には、普通のもので充分だと思っただけだな。でも実は、夜月家もすごいお金持ちなんだ。あたしも初めて夜月家を訪れた時はすごい驚いた。

「美羽ー！早くしろよ！遅いぞー！！」

「・・・・・・・・・・。」

そんな海斗の声で、何人かの下校中の生徒がこっちを向いた。ああ、そんな大声であたしの名前を呼ばないでよ！恥ずかしい・・・・。あんまり立ちたくないんだけど。

「美羽ー！！」

「・・・・・・・・他人の振りしていいですか。」

「ほら！手をつないで！！」

「やだよ。子供じゃないんだから。」

「駄目。はぐれるだろ。お前方向音痴なんだから。」

「・・・・・・・・・・。」

おとなしくつながれることにした。いや、だって方向音痴だったのはちゃんと自覚・・・してるし・・・でもそうはつきり言われるとなんだか悲しいんだけど。まあどっちにしろ、海斗は一度言い出したら聞かないというか、聞こうともしないからな・・・。しようがないか。こうしてあたし達は我が家へと帰っていった。

「お嬢！！若！！戻りやしたか！！」

「おう。」

「ただいまー。」

何出分か歩いて、やっと家に帰れた。途中で道行く人に『仲良しねえ』とか言われてしまったんだけど・・・。あれ、絶対恋人だと思われてたぞ・・・。

因みに、今私たちに話しかけてきた・・・というか、挨拶してくれたのは・・・んー説明すると結構面倒なことになるんだけど。実は夜月家は「夜月組」って言うていう・・・まあ、いわゆる極道つてやつなんだ。で、話しかけてきたのは、海斗のお父さん・・・つまり、夜月組の組長の部下・・・いや、舎弟(?)なんだ。厳ついやつばっかだけど慣れればそんな怖くもないし、結構皆良い人たちばっかりなんだよ。

「どうかしたの?」

それにしてもさっきから皆どたどたしてて騒がしい。いつもはそんなことないのに。

「えーと実は今日、頭のダチが来るみたいで・・・皆その準備で忙しいんですよ。」

「えっ！友達なんていたんだ・・・知らなかった。」

「親父はあんま人と関わるやつじゃねえからな・・・。」

「海斗は知ってるの？その友達って・・・。」

「いや。知らない。」

ふーん・・・どんな人たちなんだろ？・・・なんかだんだん興味がわいてきたかも。

「ちょっと覗いてみようかな・・・。」

「だーめー!!」

「なんで。」

「危ないだろ！俺の美羽にもしなにかあつたら・・・!!」

「別に海斗のじゃないし。あたしはあたしのだし。海斗には関係ないでしょ。」

「ある！俺、美羽がいなきゃ生きていけない!!」

「んな大げさな・・・。」

そんなこんなで、ちょっとした言い合いが始まりそうになったとき、遠くの方から舎弟の人の声がした。皆に何か伝えて回っている。ある程度、その人との距離が近づいてきて、やっと何を言ったのか聞き取れた。

「おい！頭のダチが来たぞ!!」

「!!!!!!!!」

それを聞いて、さっそく見に行こうと走り出そうとしたら・・・。がしっ！

・・・海斗に後ろから羽交い絞めにされた。くそう！後ろからなんて卑怯だぞ！それでも極道の息子か!!

「・・・・・・・・っ！離してよ!!見に行くんだから!!」

「駄目だつて言つてんだろ!!」

「……くそっ! そっちがその気なら……。あたしは、海斗の力が少しだけ緩むと同時にクルリと方向転換して海斗の方を向いた。そして上目遣い。」

「お願い!! 海斗!!」

「……っ!! だ、駄目だ!!」

えーと……。こういうのなんて言うんだっけ……。? おねだり? ……いや、違うような……。ああ、もう何でもいいや。因みに、自分が今どんな顔してるかなんて例え演技だしてもわかんないし、わかりたくもないからそんなことは考えない。考えただけで吐き気がする。でもなぜか今日まで生きてきて、このお願い攻撃(?) で海斗に負けた覚えはない。最初はこっちも応戦して殴り飛ばしてたんだけど、そしたらいろんな人から怒られるから。

「あとで海斗のいうことなんでも聞いてあげるから!」

「うっ! わ、分かった……。」

よっしゃ! 勝った!!

「で、も! 影でこっそり見るだけだからな?」

「うん。分かつてるって。」

そついうと、海斗はニヤリと笑った。え……。な、何?

「そのかわり、ちゃんと後で俺の言うこと、な・ん・で・も、聞くんだぞ?」

「う……。うん。分かった。」

「なんでも」の部分強調した海斗。なんでもなんて言わないほうがよかったかな……。ちょっと反省。まあ、とりあえずそのことは置いて。あたし達は、例のお父さんの友達とやらを見に行くことにした。あの人と友達になれるなんてきつと普通の人じゃないんだろうなあ。

「ねえ、お父さんの友達ってどこ？」

あたしは、傍にいた比較的仲のいい舎弟さんに声をかけた。

「お嬢、お帰りっす！えつと、もうすぐ……。あつ来たっすよ！！」
「どうやら、息子さんも連れてるみたいっすね。」

近くにいた舎弟さんが教えてくれた。

「んー……。あつ……。あつ……。あつ……。」

見えた……。黒い髪をオールバックにしている、なんか……。うん、ホストみたいだ。あつ、でもなんだか目にすごい威圧感みたいなものがある、近寄りがたい雰囲気が出て……。でも、それよりもあたしの目を引いたのは……。その人の後ろにいる……。自分、その人の息子さん……。かな。さらさらのきれいな銀の髪が歩くたびにふわふわ揺れて……。とても印象的な青の瞳と目が合つて、彼はあたしに向かってふわりと微笑んだ。そう、まるで天使みたい……。ん？目が……。合った？

「……。！！！！！！」

や、ヤバイ……。海斗とこっさり見る約束だったのに。あろうこ

とか目が合ってしまった……。内心焦りながら、ちょっと前までの出来事を思い出す……。

『美羽！もうちょっと影から見ろよ！！』

『えっ。大丈夫だよ。もうちょっと近くで見ようよ！』

『……はあ。ったく。くれぐれも！見つからないようにしろよ！』
『分かってるってば』

……。い、いや、大丈夫。あの人と目なんて一切合っていない。
うん。そうだ。そうしよう！！

「……………美羽。」

……。あ。なんか後ろからものすごい低い海斗の音が……。ものすごい黒いオーラが……。あたしは、恐る恐る後ろを振り向いた。
ヒッ！！！！こわ！！海斗さん！！怖い！！！！目が笑っていない！！！！！！

「な……。な、に……。。」

「ん？いや、今さあ、美羽……。あいつと目が「合っていない！合っていないから！！」」

「あはは……。あっちゃったよな……。？」

「だ、だから！合っていないって「合ったよな？」」

「……。っ、ご、ごめんなさい。……。でも、ちょっとだけだし。」

「ちょっとこっち来い？」

「は、ハイ……。。」

そうしてあたしは、海斗に半ば引きずられるようにしてその場を去ったのでした……。

銀髪青目の青年

「美羽」

「………っう！ か、海斗！ もうちよつと離れてほしいんだけど………！」

「んー駄目。こうでもしないと美羽、俺の話し聞かないだろ？」

「だ、だからって……耳元でしゃべらなくても……。」

「じゃあ、もうあんなこと言わない？俺との約束破らない？」

「うん。」

えーと・・・この状況、どうやって説明すればいいんだろ・・・
 ・ ・ ・簡単に言うとなたし海斗に壁に押し付けられて、耳元で説教・
 ・ ・ ・っばい事言われてます。え・・・これ、説教する体制じゃないよね？かれこれ15分くらいこうしてんだけど・・・こいつに羞恥心とかいうものはないのか！？っていうか、こいつわざと耳に息がかかるように話してる・・・うん。わかつてるよ。あたしが耳弱いの知っててやってるんだよね。海斗はたまにすごい意地悪になる時があるから・・・うう、これなら一発殴られた方がまだましだ。

「まあ、今回はこれくらいにしておいてあげるけど……次ぎ約束破ったら……分かるよな？」

・ ・ ・ ・ ・
二 ・ ・ ・ ・ ・
怖えええええ！！！！！！

「うん。うん。……いや、ハイ……。」

「ん。いい子。」

そういつて海斗はいつもの笑みをつくって、あたしの頭を優しく撫でてくれた。・・・このくらいじゃさっきの怖さは払拭されないけど。

「んじゃあ、戻るか!」

「う、うん。そうだね。」

さっきとのギャップに多少戸惑いながらも素直に従うことにした。そして、そこから運命の齒車が回る。私は廊下を歩いている途中で、彼に会った・・・。

「「「あつ」「」」

はい。見事にはまりました。あたしと海斗がそれぞれの部屋へ戻っている途中（さっきの部屋は空き部屋）、例の銀の髪に青い瞳の彼と出会った。さっきははつきり見れなかったから分からなかったけど・・・。あ・・・れ?なんで・・・なんで、“彼”がここに?

“彼”、というのは。あたしには、小さい頃からずっと探してた・・・会いたい人がいた。あたしが一人で泣いてた時、そばに来て慰めてくれた人・・・。闇の中にいたあたしを救ってくれた人・・・。

あたしの・・・かみさま光・・・

「あなた・・・小さい頃、あたしと会いませんでしたか？」

「えっ？」

「あ、い・・・いえ！！なんでもないです！！！！」

何言っただあかし！よく見てみたら結構違うじゃん・・・。“彼”は眩し過ぎるくらいに輝く金色の髪だった。今あたしの前にいる彼は残念ながら銀色だ。きっと“彼”と同じ青い瞳をしていたから重なっちゃったんだ。それに、もう何年も経つのに・・・分かるわけないか。心の中で自嘲的に笑って、今日の前にいる彼に笑いかけた。

「えと・・・どうしてここに？」

「いや、ちよつと退屈でさ。抜け出してきちゃったんだ。」

「んなことしていいのかよ。」

「うん。俺、無理やり連れてこられただけだし。ここの組長さんにも何にも言われなかったからね。気をつけるよ、としか。」

そういうと、彼はにっこりとあたしに向かって笑いかけて・・・。

「ねえ、俺暇だから。話相手になってくれる？」

そういつて彼はあたしの腕を引っ張った。

「えっ・・・ちよ・・・。」

うわ、結構強引・・・。なんか意外と力強いな・・・って、当たり前か。男なんだし。

「おい！！俺の美羽にさわんじゃねえよ！！！！」

「ああ、君は来なくていいよ。俺はこの子とだけしゃべりたいから。」

」

そして彼はあたしをふわりと抱きしめた。え、何これ・・・なんでこんなことになってんの？

「・・・てめえ・・・美羽を離せよ・・・。」

やっぱ・・・海斗めっちゃ怒ってる・・・。

「あゝ、えつと・・・とりあえず離し「駄目」

「・・・へっ？」

「君は俺の言うことを聞いていればいいの。わかった？」

えーなんか・・・俺様？なんだかこの人のキャラ分かんなくなってきた・・・。

「・・・はあ・・・。」

そんな青年の言葉にあたしは、返事ともため息ともつかない言葉を返した。

「・・・ところで、何であたしだけ？」

「ん？だってあいつ、俺のことすごい敵視してたから。」

「はあ。」

今、あたしと彼は家の庭にあるベンチに座っている。あのあと・・・彼があたしを抱きかかえ（お姫様抱っこで。ものっそい恥ずかしかった。）ものすごいスピードで海斗をまいたさきにこのベンチがあったのだ。吃驚した。あの海斗でさえ彼のスピードにはついてこれなかったのだ。校内で一番足が速いと言われている海斗が・・・。

この庭は前に一度迷った時に来たことがあるけれど、それ以来見たことすらなかった。海斗も知らない場所なんじゃないかな？

「ねえ、美羽」

えっ……。

「な、なんであたしの名前……」

「ああ、さっきの彼が呼んでただろう？」

「あ……そう、ですか。」

「うん。それに……前に俺たち、一度だけ会ったことがあるから。覚えてない？」

……え……それって……もしかして……。

「聖夜……くん？」

「そう。覚えててくれたんだ。嬉しいな。」

「で、でも髪が……。」

「染めたんだ。こつちの方が俺的には好きだし。」

「そう、なんだ……。」

と、とりあえず、頭の中を整理しなきゃ……。とにかく本当に、“彼”は……。今ここにいるんだ……。間違いなんかじゃなかった。ここにいて彼が、あたしの……。光。

「………っ」

やばっ！なんか泣きそうになってきた……。だめだちゃんと言わなきゃ。ずっと彼……。聖夜君に言いたかったこと。それと『ありがとっ』って……。

「あつ、あり．．．がとつ．．．！！」

声が震える。それでも、伝えたいから。必死に言葉を紡いで。

「あの時っ！．．．あたしを．．．助けてくれてっ．．．う、嬉かつ．．．た。」

ちゃんと笑えてるかな．．．？

「ううん．．．俺はなにも。」

「そんなことない！！聖夜君がいたから、あたしはっ！」

そっぴうと聖夜君はくすつと笑って．．．。

「どういたしまして。俺も君の役に少しでも立てたんなら嬉しいよ．．．ねえ、ひとつだけお願いしてもいい？」

「ん．．．な、に？」

「俺のこと聖夜って呼び捨てにして．．．ああ後、無理して敬語とか使わなくていいからね。」

．．．．ばれてましたか。あんま敬語使うのとか慣れてないからな．．．。というか何気にムードぶち壊し。ああ、でも彼の声はやっぱり落ち着くな．．．。心地よくあたしの心に響く．．．あの時もそっぴだった。何も変わらない、唯ひたすらに優しい声。

「あつ。そっぴだ。」

「？」

「ごめん。ちよつと待ってて。」

そして聖夜は紙とペンを出して、何かを書き出し、あたしに差し出した。

「はい。これ。」

「・・・これは？」

そこには、地図らしきものが書いてあった。

「また今度、その場所に来て。裏には住所も書いてあるから。でも、来る時は必ず一人で来ること。分かった？」

「う、うん・・・。それより、ここはどこなの？」

「それは来てからの楽しみでいいこと。ね？あ、誰にも言っちゃ駄目だよ。」

「・・・・・・わかった。」

行った事のない場所だけど・・・ここに行けばきっとまた聖夜に会えるんだ。あたしは、地図を書いた紙を落とさないようにしっかりと制服のポケットに入れた。

「じゃ、俺もう帰るけど・・・美羽は道分かる？」

「・・・・・・ごめんなさい。」

なにせ、方向音痴なもんですから・・・。って、これであたし地図の場所にたどり着けるのかな。でも、なんやかんやで今までも何とかなったし・・・大丈夫か。

「そっか。なら一緒に行こう？」

「・・・覚えてるの？」

こんなに広いところなのにな？それに、結構複雑なところ通ってたと思

うんだけど。

「もちろん。走りながら、目印になるもの何個が見つけてきたから。」

「そう……。」

なんか……複雑。あたしだってもう何年もこの家に住んでるのに……まあ、そんな事を言っていてもしようがないので、大人しくついていく。そして歩くこと10分……。

「美羽!!」

「あ、海斗。」

海斗が現れた。そしてあたしに抱きついてきた……聖夜を威嚇しながら。でも、海斗はだいたい誰にでもこういう態度だからあんまり気にしない。いちいち気にしてたら、あたしの胃に穴が開く。主にストレスで。

「美羽……こいつになにもされてないか？」

「うん。話してただけだから。ほら、だから睨まない!」

あたしは海斗の頭を軽くたたいた。

「……分かった。……おい、お前早く帰れよ。」

……いや、その前にあんた分かってないだろ。そんな海斗の態度にも聖夜は微笑みながら対応した。……なんか、大人と子供みたい。もちろん海斗が子供の方で。昔からあんま成長してないもんなあ。

「うん。じゃあ、美羽またね。」

「あつ！う、うん！！・・・また。」

そうして聖夜は去っていった。・・・よかった。会えて・・・
また恩返しできたらしいな。

今日は、あたしの長年の夢が叶った日だった。

あの頃（前書き）

微妙にR15くらいの表現入りますので、ご注意ください。

この線からは、お母さん目線

です。

あの頃

『あんななんて・・・いなくなればいいのに』

それは、あたしがまだ5歳の時だった・・・。

あたしの家は、それなりに裕福だった。皆笑顔で・・・幸せだった・・・。その当時のあたしの名字は佐伯^{さえき}。

母の名前は佐伯菜穂^{さえき なほ}。
父の名前は佐伯若狭^{さえき わかさ}。

そしてあたしには双子の兄がいた。

名前は佐伯空^{さえき そら}。

その人たちとあたしで幸せに暮らしていたんだ。

「美羽！ごはん運ぶの手伝って。」

「はい。わかった。」

あたしはまだ子供だから深くは考えていなかった。あたしとお父さんが・・・あんまり似てないこと。でも、空はちゃんとお父さんに似ていたんだ。だからあたしは、空ともあんまり似ていない。最初はお母さんもお父さんも空も。誰も、そんなこと気にした風じゃなかったから・・・それは全然不自然なことじゃないって・・・自然なことなんだって思ってた。

「ただいまあゝ。」

「あつ！お帰り若狭！！」

お母さんが元気にお父さんをむかえに玄関まで行く。お父さんとお母さんはとても仲良しだ。おしどり夫婦って奴かな？あたしはそんな二人が大好きだった。いつだって笑顔の絶えないこの家庭が好きだった。

「美羽。ただいま。」

「うん。お帰りなさい。」

「空は部屋かな？美羽、もうご飯だから呼んできて！！」

「わかった。」

でもね、子供なりに気づいていたのかもしれない。二人があたしを見る目が、ときどき・・・とても冷たいこと。笑ってても、それは心からの笑いじゃなかった。唯、認めたくないだけで。

そして・・・、

「・・・空。・・・ご飯だって。」

「・・・うん。」

空は・・・いつからかあたしに笑いかけてすらくれなくなった。まるで、心のそこから汚いものでも見ているような目。空はまだあたしと同じ5歳だったから・・・そういう態度を隠そうともしない。それもいきなりで、あたしも最初は戸惑ったけど・・・そのうちそんな態度にも慣れてきたし、なるべく気にしないようにもした。

「ママ。今日のごはんはなに？」

「ん」とねっ！今日は空の好きなチャーハンだよ！！」
「やった！」

あたし以外の前ではこんなにも笑っているのにね……。でも、今思えばそれも……。仕方のなかったことだったのかもしれないと思う。……。そして晩御飯中。

「空は保育園どうだった？」

「んー？すっごい楽しかった！！」

「そうか。それは良かったなあ。」

「うん！！」

お父さんとお母さんは空とばかり会話をしていた。幸せそうな家族達を見るのは嫌じゃなかったよ。人の笑顔を見ると、自分まで笑顔になれるから。そんな家族達の雰囲気だけが、まだ幼かったあたしの心を支えていた。

「そういえば明日は空たちの誕生日だったな！！」

「そうねえ・・・プレゼント、楽しみにしておいてね」

その言葉に、あたしはとても楽しみでしかたがなくなった。まだ、

大丈夫だと思っていた。

．．．．．そんな思いが、簡単に裏切られるとも知らずに．．．
．．．。

その日の深夜。

あたしはなかなか寝付けなかったので、水でも飲もうと部屋を出たんだ。ちなみにあたしは一人部屋。暗い場所も怖くなかったので、全然平気だったけど．．．。空にも一応自分だけの部屋があるけど、空は寝る時は決まって、お母さん達のベッドへと入っていった。3人で幸せそうだったな．．．そんな光景をみているとまるで、あたしなんて最初から存在していないような感じがしていたのを、今でも覚えている。

でも、その日は違ったんだ。

部屋を出ると、空の声がした。．．．それと、お母さんとお父さんの声も．．．。

「もう撲やだよ！なんであんなやつと一緒にたんじょうびなんて．．
．．！！」

「空．．．．．つ。若狭．．．私も、もうっ限界よっ！！」
「．．．．．」

．．．．．？なに話してるのかな？

軽い興味で扉の向こうの会話を隠れて聞いていた。．．．．．この行動が最悪の事態を早めてしまうことになったんだ。

「若狭!!」

「パパ・・・どうして?・・・あいつはっ!パパの本当の子供じゃないかもしれないんでしょ!?!」

「・・・・・・・・空!!」

「・・・・・・・・いま・・・なんていったの・・・・・・・・?あたしが・・・お父さんの本当の子供じゃない・・・・・・・・?あたしは動揺して、その場に座り込んでしまった。」

ガタツ!!

「「「!!!!!!」」」

「・・・・・・・・美羽?」

その音の中にいる皆に聞こえてしまったみたい。お父さんのあたしを呼ぶ声がある。あたしは仕方がなく、皆の前へと姿を現した。

「おとーさん・・・・・・・・本当なの?・・・・・・・・さっきのはなし・・・・。」

そういいながら、皆の顔を見渡す。もうお母さんですら笑ってくれていなかった・・・・。

「ああ・・・・・・・・本当だ。・・・詳しいことは明日話すから・・・・・・・・今日は寝ていなさい。」

あたしは大人しく自分の部屋に戻ることにした。・・・・・・・・みんなあの視線がとても怖かったから、少しでも早くその視線から逃れたかった。

その日の夜・・・あたしはずっと泣き続けていたな・・・。

・・・そして、運命の日。あたしの誕生日・・・。

「美羽。起きたか？・・・話をするから、リビングに来なさい。」
「・・・うん。」

あたしと空の誕生日は、ちょうど休日だった。だから、朝からなんも楽しくない話を、よりによって誕生日の日に聞かされることになった。リビングに行くと、お母さんと空もいた。・・・とても冷たい視線をあたしに向けて・・・。

「美羽。座って。」

あたしは、お父さんに言われ静かに座った。

「美羽。よく聞きなさい。まだ子供のお前ではよくは理解できないと思うが・・・。」

「・・・っ若狭。私が話すから・・・。」
「・・・ああ、そうだな・・・。」

お母さんはゆっくりとあたしを見た。その瞳には・・・怒りと憎しみと・・・悲しみを、宿らせて。それから、お母さんの悲劇が語られる・・・。

「私が若狭と付き合ったのはまだ私達が18歳の頃・・・。」

私と若狭は同級生で、同じクラスになって仲良くなりいろいろ話すようになつて・・・お互いに惹かれあつていった。そして、二人が付き合いだしてちょうど2ヶ月が経つたころ。

ある男の子が転入してきた。

中性的な恐ろしいくらいに整つた顔・・・。周りはこれでもかつてくらいに騒ぎ立てていたけど、私は興味すらなかった。なんかその人・・・まったく笑わなくて怖かつたし。

なにより、私には若狭がいたから。

・・・でも、ある日。その人は、私にこういつてきたの・・・。

「俺、君が好きになつた。だから付き合つて。」

・・・彼は少し微笑みながらそういつた。

「ごめんなさい。私には恋人がいるので・・・。」

この人も笑えるんだと少し驚きもしたけど・・・それで私の心が変わるなんてことはやっぱりなくて。はつきり断った・・・。

「そう・・・。」

私たちがした会話はこれだけ。・・・これで、諦めてくれると思っていた。

・・・なのに・・・。

「まあ、俺は諦めないから。覚悟しておいてね。」

「・・・。。。。。。っ！」

そういった彼はすごく冷たい瞳で私を見てた・・・。怖くて・・・もう、彼とは関わりたくないと思った。だからかは覚えていないけれど、彼の言ったその言葉は無理やり何かの冗談だと決め付けて、若狭にも話す事はなかった。そして、私達が3年になって卒業しても、彼に話しかけられることはあっても脅されたりとか・・・そういうことは一度もなかったから油断していたの、かな・・・。

私と若狭は卒業して、すぐに結婚した。

・・・。。。。。。そして、何ヶ月か過ぎたある日、事件は起こった・・・。

・・・それはまだ肌寒さが残る季節のこと。私は買い物ついでに少し散歩でもしてみようと、いつもとは違う道を歩いていた。・・・彼とは、その道の途中にある、公園で会ってしまった・・・。

私は、歩いている途中で少し疲れたので公園のベンチに座ることにした。それから何分か時間が過ぎてから、彼は私の前に姿を現した。・・・すごく驚いたけど、そこまで警戒しなかったわ・・・。それは高校生時代、結局彼は何もしてこなかったから。今思えばそれも・・・彼の策略だったのかもしれないけれど・・・。

「・・・なんで、あなたがこんなところにいるの？」

彼は卒業したと同時にどこか違うところへと引っ越したと聞いていた。本当か嘘かは分からない。

「君に逢いたかったから。」

「え？」

・・・なにを今更・・・と思った。

「・・・悪いけど私・・・もう、若狭と結婚したから。」

内心はすごく混乱していたけど、私は努めて冷静に言い放った。得体のしれない恐怖を押し込めて。このときすぐに逃げていればよかったのに・・・。彼はその時、くすりと笑って・・・

「うん。そんなことくらいもうとっくに知ってるよ？」

私は、その言葉に目を見開いた。・・・だって・・・結婚したことなんて、彼に話した覚えは一度もなかったから。

「・・・な、ん・・・で・・・？」

「言っただでしょ？『俺は諦めないから、覚悟しておいて』って。」

声が震えてまともに言葉なんて出てこなかった・・・体も・・・固まって動けなかった・・・。

「こっち来て。」

その公園は木に囲まれていて隠れる所も多くて、大きな目の公園だった。彼は、私が動けないことに気がついて私を抱えあげ、恐らくあんまり知られていないだろう周りからは完全に見えないところへ移動した。

・・・それから彼は、私を・・・無理やり抱いた・・・。

「・・・そして、その次の日、私は・・・妊娠した。」

・・・その意味も、あの時のあたしはよく分からなかった・・・わかってあげられなかった・・・。

「・・・っ」

空は、何も言わずに泣いていただけだった。そういえば空は何故かこの頃から他の人より大人びていたな・・・。

「あの時！あいつは最後まで笑ってたわっ！それに・・・！まるで・・・なんでもない事のように・・・っ平然と私達の前に現れてっ・・・。」

「菜穂っ！！・・・もついい・・・。」

目の前が真っ暗になった。・・・ここから先の言葉は・・・なんとなく予想できてしまったから・・・。

「・・・美羽・・・そして・・・双子が生まれて・・・空は俺の遺伝子を濃く受け継いで、お前は・・・あいつの遺伝子を主に濃く受け継いだ・・・だから俺は、はつきりとお前の本当の父親とは・・・いえない。」

ああ、だからあたし・・・こんなにもお父さんに似てなかったんだ・・・。こんなにもこの家族に・・・嫌われていたんだ・・・。

「あんたなんてっ！！・・・生まれてこなければよかったのっ！！そしたら・・・こんなに、苦しまずにすんだのに・・・！その顔見ると・・・あいつを思い出して・・・なんで・・・なんでいつまでも私達を苦しめるのっ！！」

その時、あたしの頬を・・・一筋の涙が伝った。その言葉はあたしと、そしてなによりもあたしの本当の父と言える人に向けて言われた言葉。ごめんね・・・お母さん・・・。

．．．．．生まれてきてしまつてごめんなさい．．．。

がたっ！！

．．．．．？お母さん．．．．．？

「あんたさえいなければ．．．．．！私達は．．．まだつ．．．
幸せに暮らせていたのに．．．．．つ！！」

そついうとお母さんは、愛用の小型ナイフを取り出して．．．あた
しに向かつてそれを突きつけてきた．．．．．。お父さんと空も驚
いている．．．。

「菜．．．．．穂．．．．．。」

「ママ．．．．．？」

「．．．．．死んでよ．．．．．。」

「．．．．．っ！！や．．．．．め、て．．．．．っ．．．！！．．．
．．．やっ！！！！」

怖い．．．．．こわいつ！！あたしはこのとき初めてお母さんが怖
いと思つた。お父さんが懸命に止めようとしてくれるけど、お母
さんはやめる気配なんてまるで見せない．．．．．。お母さんは、本
当に心のそこからあたしのことが嫌いなんだと．．．改めて実感さ
せられた．．．。あたしは、あたしを殺そうとするお母さんに必死

で抵抗した。

・・・でも、今は抵抗したことに後悔してる・・・。

・・・その理由は・・・

「・・・・・・・・つ！！！！・・・や、やだああ！！！！」
「！！！！・・・うつ！！」

「！！！！！！菜穂！！！！！！」
「ママあ！！！！」

・・・抵抗して、振り回していた手が・・・お母さんのナイフ
を持っている手に当たって・・・持てる限りの力で押し返し
たら・・・そのナイフが・・・お母さんのお腹に刺さってし
まったから・・・。

飛び散るお母さんの血で・・・

目の前が・・・真っ赤に染まった・・・。

お父さんは急いで救急車を呼んでた。空はずっと泣き続けてた・・・。
。しばらくして、救急隊員の人たちが来た・・・。あたしは、
ただただ目の前のこの光景を信じられなくて・・・。。呆然と
その場に突っ立っていることしかできなかった・・・。

・・・あたしが・・・お母さんを・・・殺したの・・・。
？

別れと出会い

その後、医師の人にお母さんはかえらぬ人となったことを告げられた。でも、あたしは正当防衛で子供だったから罪には問われなかった。

．．．．．そして、お父さんと空は．．．．．

「話しかけんなよ！！人殺し！！！」

「お前が菜穂を殺したんだ！」

顔を会わせるたびに言うようになった。『人殺し』．．．と。そしてついに．．．．．

「この家から出て行け。お前とは縁を切る。」

「お前は．．．俺たちの家族じゃない。」

あたしはこの佐伯の家を離れた．．．。そしてあたしはその日から約5ヶ月間．．．施設で育てられた。でも、あたしの中で育った闇が簡単に消えることはなくて．．．。あたしはその日には、笑わなくなつたし泣かなくなつた．．．。だからだと思うけど、友達もできなくて．．．．。

そんな中、『セイヤ』が現れた。

それは、あたしが施設に入って間もない頃のこと。

とてもいい天気だった。施設に入っている子たちは、あたしを入れて10人程度。その皆と施設の大人たちで遠足に行くことになった。・・・理由は、『世の中の素晴らしさをもっとわかってほしい』からだそうだ。・・・あたしは、こんな世の中・・・って思っていたけど・・・まあ、それはおいといて、あたしはその遠足の帰り・・・迷子になったんだ・・・しばらく皆を探し回ってたけど、そのうち疲れてきてしまったので、近くにあった人気のないベンチに座って休憩することにしたんだ。正直言って悲しくはなかった・・・あれ以上の悲しみが、あたしの中にはあつたから・・・。

それから10分くらい経った時だった。

「君、どうしたの？大丈夫？」

あたしの目の前に、一人の男の子が現れた。・・・その男の子が聖夜だった。闇の中にいるあたしには眩しすぎるくらいの金色の髪に、澄んだ青い瞳。

天使みたい・・・。

そんな事を思っているうちに、聖夜はあたしの隣に座った。

「・・・なにか用？」

突き放される前に、突き放す。あたしはいつの日からか、そんな接し方しかできなくなっていた。・・・怖い、から。闇の中にいるのは哀しい。でも、光の中にいてそれを失うのが怖い・・・。どうせ皆あたしから離れていくんなら、最初から突き放していた方が楽、だから・・・。だめだな・・・。あたしは・・・。

「ううん。特に何も無いけど・・・。おれ、暇だから。話し相手になつてよ!!」

にこり

本当に輝いているかのような笑顔に絆されたのかもしれない。少しくらいならいつかと思つた・・・。それに、どうせ会うのは今日が最初で最後だろうし・・・。それに、思うんだ・・・。施設の皆は明るくて元気だけど・・・。皆なにかしら、闇の部分を隠しているように見えることがある・・・。だから、このなんのかげりもない無邪気な笑顔なんて最近はある限り見てなくて・・・。見ようともしなくて、この笑顔に・・・。救われた気がした。あたしのしたことが・・・。罪が許されるようなきがしたんだ。

・・・許されてはならないことなのに・・・。

「いいよ。」

こういったこと・・・。もう、後悔はしたくない。現にあたしは聖夜に会えて・・・。よかったと思えてる。それから、たった数分しか経ってなかったけど、あたしは聖夜と話しているうちに、だんだん楽しくなつてつて・・・。完全に警戒を解いていた。

「・・・そういえば、聖夜君はどうしてこんなところにいるの？」
「それは・・・うん・・・退屈だったから？」

そういつた彼は、少し疲れているようにも見えた。

「??」

「美羽は知らなくていいことだよ。」

そういい、無理に笑顔を作った聖夜は、これ以上聞くなといっているように・・・追求するのはやめた。

「美羽は？」

そう聞かれて、少し焦った。この話題は振らないほうがよかったかと・・・まさかあたしまで聞かれるなんて思ってた。普通に考えれば当たり前前の流れなのに。

「えっ・・・あ、あたしはその・・・迷ったの・・・」
「

・・・ほんとのことだったけど、ちょっとこう言つのは恥ずかしかったな・・・」

「・・・えっ!・・・大丈夫なの?家族とか、心配してるんじゃない?」
「

「・・・うん。大丈夫。」

あたしに家族なんてもういないしね。

「本当に？」

ビクッ！！

心の内を見透かされたような気がして、肩が震えた。

「……うん。そのうち誰か来るよ。」

「その誰か」って、だれ？」

なんでそんなこと聞くの？あんたには関係ないでしょって……。そういいたかった……。でも、あたしの出した言葉はそれとはまったく違うもので……。。

「施設の人。」

本当はわかってほしかったのかもしれない。

「家族は……もういないから……。」

受け入れてほしかったのかもしれない。

「……そつか……。」

「うん。」

ずっと待っていたのかもしれない。

「ずっと、ずっとがまんしてたんだよね？美羽、偉いね。・・・だけれども、がまんなんてしないでいいよ・・・。」

・・・ああ・・・なんでこの子はあたしの欲しい言葉ばかりくれるのだろうか・・・。

・・・このときの聖夜が・・・あたしは・・・

神様みたいに思えた・・・。

・・・それからあたしは、聖夜の前でみつともなく泣いてしまった。聖夜は、ずっとあたしの頭を撫で続けていた・・・。あたしが誰かの前で泣くなんてことほとんどなかったから、少しだけ恥ずかしかったけれど。でも、心の中でずっともやもやしていたものが、すうっと涙と一緒に零れ落ちていって・・・すごくすっきりしたのを覚えてる。聖夜は施設の人たちが来るまで、ずっと一緒にいてくれた・・・。

次の日からあたしは、少しずつただけど笑えるようになった。友達も少しだけ増えた・・・かもしれない。

この日からずっと聖夜にお礼を言いたくて・・・外に出るたびに会えないかなって思ってた・・・それが生きがいにもなった。

そして、数ヶ月経ってあたしは夜月組の当時若頭だった、夜月剛・
つまり、海斗のお父さんに拾われ、今に至る。

・・・これが、あたしの『過去』・・・。

聖夜に出会えて、やっと何年も思い続けていた願いが叶ったんだ・
・
・

・・・聖夜にありがとって言えたんだ・・・。

確かに、あたしをこの『過去』から救ってくれたのは聖夜だ。・・・
・・・でも、あたしにはもうひとつの『秘密』がある・・・。

それはまだ、誰にも言えない秘密・・・。

会いたくて

やっと・・・聖夜に会えた・・・。
彼は何処に住んでいるのだろうか。

どんな所で、どんな生活をしているのだろうか・・・。

会いに行こう

もっと知りたいと思った。彼のことを知れば知るほど。もっと彼を知りたいと思うてしまう・・・。

今日は日曜日。学校はお休み。海斗は、お父さんの仕事を手伝うことになったらしい。・・・そういう時は、だいたい樹と遊びに行っていたんだけど、樹も今日は用事があるらしい。好都合だ。あの日、聖夜がこの家に来てから約一週間が経ってしまったが、これでやっと会いにいける・・・。

そして今あたしは、知らない町にいる。

・・・ちなみに、迷子ではない。

あたしは、近くを通りかかった女の人に声をかけた。・・・
もちろん、道を聞くために・・・。

「あの!!えつと・・・この場所ってどこら辺だか分かりますか?」
「えっ!?!あ、はい。・・・ココは、この道を真っ直ぐ行つて・・・」

道行く人たちは、突然声をかけられたのに驚きながらも丁寧に教えてくれた。・・・そう、あたしは出歩く時、いつも人に聞かなければたどり着けなくて、今日も例にもれず道行く人に聞きながら目的地を目指しているのだ。目的地?・・・もちろん、前に聖夜が教えてくれた場所。せっかく教えてくれたのに、行かないなんて失礼だしね。それと・・・あたし自身がもっと聖夜のことが知りたいつて思っているから。

「あの・・・。」

早速行ってみようと足を踏み出したら、さっきの女の人に呼び止められた。

「何ですか?」

「あの・・・、本当にそこに行くんですか?」

「?はい。そうですけど。」

「・・・そうですか・・・あの、気をつけてくださいね・・・。」

女の人は、遠慮がちにそういった。

「・・・・・・・・？そこには何かあるんですか？」

「あ・・・・いえ。そういうわけではないんですけど・・・・あそこはガラが悪い人たちが多いので、あまり人は近寄りたがらないんですよ・・・・・・・・なので・・・・・・・・。」

・・・・そっか、あたしのこと心配してくれてるんだ。あたしは、自然に笑顔になっていった。他人にとっても親切な彼女に。

「心配してくれてありがとうございます。あたしは大丈夫ですので、どうか気にしないでください。」

あたしがそういうと彼女は、頬を桃色に染めながらも、微笑んで「それでは」と言い、去っていった。やっぱりお礼って、言う方も言われる方も気持ちいいよね。美羽が彼女の桃色に染まった頬を見てそう思うのは、もはや必然。

「ほんと、ガラが悪いのばかりだな・・・・。」

あたしはポツリとつぶやいた。幸いにもその眩きを拾ったものはいなかった。でも、ガラが悪い人たちが多いつてことはココらへんであつてること。美羽は、さっき言われた道を思い出して、いちいち確認しながら、迷子にならないように慎重に進んでいく。でも、進んだ先は大きな古びた建物ばかりで、普通の家っぽいものは何もなかった。物覚えは良くせに、なぜ迷子になるのか不思議だ・・・・。美羽はそんな事を思いながらも、どんどん先に進んでいく・・・・。多分この行動が、迷子になる原因なのだと思うのだけれど、本人はまったく気づかない。

そうして歩いているうちに、少し広めの公園に着いた。ちょっと一休みしよう。さすがに何時間も歩きっぱなしで疲れたので、美羽は

公園のベンチに座り、休憩することにした。そして、休憩すること
10分。

「ねえ、お嬢さん！一人？」

3人の男が近寄ってきた。・・・メンドッ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・それが何か？」

「うわっ！そんなに睨まないでよ！！・・・可愛いなあ・・・。」

「・・・・・・・・・・なにこいつ。頭大丈夫デスか？」

「ねっ。こんなところつまらないでしょ？」

「俺らと一緒に遊ぼうぜ？」

「・・・・・・・・・・忙しいから無理。」

このままじゃ埒があかない。あたしは、ここを去ることにした。こ
んな人たちに構っている場合ではない。早く目的地に行かなければ、
と。

「じゃあね。さよなら。」

「ちよ、ちよっと！待ってよ！！！」

でも、これはもはやお約束。やっぱり引き止められてしまった。

「・・・なんですか？あたしは急いでいるんですけど・・・。」

「いいじゃん。ちよっとくらい。」

そういつて三人の中の一人が、あたしの腕を引っ張った。

「はあ、あのさあ．．．．．」

がっ！！

「ぐはっ！」

．．．．．は？

ごっ！！

「ううっ！！」

．．．．えっ。な、何？．．．．そこには、先ほどの3人とは違う男がいた。．．．．誰。

「．．．．大丈夫だったか？」

黒い髪に、青色のメッシュ。瞳の色も青．．カラコンか？それにしても、整った顔してんな。

「．．．あ、うん。大丈夫。ありがとう。」

．．．一応助けられた．．らしいから、お礼は言うべき．．．．．
．．まあ、あんな奴らあたしでも楽勝だったけど。

「．．．．．」

え．．．．．。なんで黙ってんの．．．。あたしは、何にもおかしいことはいってないはず。．．．．こいつ、さっきの男三人組とはまったく違う。こうして目の前にたって向き合ってるだけで、

こいつの持つてる威圧感みたいなものがひしひしと伝わってくる・
・。早くここから去った方がいい・・・よな。

「えと・・・じ、じゃあ。あたしはこれで。」

「・・・・・お前。何故こんなところにいる？」

「・・・はい？」

早くこの公園を出ようと思ったら、いきなりそんな事を聞かれた。
・・・思わず聞き返してしまったではないか。それにも、相手は律儀に答える。

「・・・何故ここにいる？」

「あ、ああ・・・ココらへんに会いたい人がいるから・・・会いに来たんだ。」

あたしは正直に答えることにした。・・・嘘をつくのは苦手だ。

「・・・・・そうか・・・。」

それっきり、この男は黙り込んでしまった。

「「・・・・・。」「」

え・・・・。またすか？あたし、沈黙って苦手かも・・・息苦しい気がしてくるんだけど・・・。ど、どうしよう・・・。

「・・・ま、まあ、場所は知ってるから。気にしないでよ。」

・・・って、こいつが何を気にするんだ！？自分で自分の言ってる事が分からなくなってきた・・・。

「・・・・・・・・どこだ。」

「は？」

「場所。」

「えっ？」

「・・・・・・・・送ってやる。」

・・・・・・・・はい？

「い、いや。いいよ。別に。すぐ近くっぱいし。あたし一人で大丈夫だし。」

そのまえに、初対面で送ってやるとかって普通ない・・・と、思うし・・・。実際今そうなっているけれど。

「場所。教える。」

・・・・・・・・言葉が通じねえよこいつ！・・・どうしよう。

正直に教えるか？いやいや。でも、この地図簡単に教えていいものなのか？ああ、あたし今人生で一番あわててるかも。だって普通こんな展開ないだろうよ・・・。そんなあたしに無情にもこの男はさっきの言葉を繰り返す。

「教える。送ってく。」

・・・・・・・・もう決定事項になってる？というか何気に命令口調なんだけど。

「・・・ここに行きたいのか？」
「うん。」

あれから何を言ってもこの彼は引いてくれなかったので、もう正直に教えることにした。そして、あたしは彼に地図を見せたんだけど・・・。

「・・・ここに何しにいくんだ？」
「だから会いたい人がいるんだってば。」
「・・・そうか。」

彼はうーんと何か悩んでいる様子だ。送ってってくれるんじゃないかなったの・・・。

あ、もしかして・・・。

「場所。分からないんじゃないよ。あたし一人でもいけるし。」
「いや。場所は知っている・・・。」

・・・なんだ。違うのか・・・。場所が分からなくて案内出来ないんじゃない・・・と思ったのに。じゃあ、一体何なんだ？

「・・・まあいい。送ってくぞ。ついて来い。」
「・・・あ、はあ・・・。」

その地図の場所に何があるんだ・・・？あたし、そこに行っても大丈夫なのかな・・・。

「・・・乗れ。」
「・・・はい・・・。」

公園を出て、左に曲がったところに一台の車が停まっていた。しかも、ただの車じゃない。……これ、どこからどう見ても高級車だ。も、もしかしてこいつ……。……お金持ちなのか？ いや……。夜月家にも高級車なんて何台もあるから見慣れてはいるんだけど……。まさかこいつまでお金持ちだったとは……。・ココらへんは、お嬢様とかお坊ちゃまとか少ない地域のはずなんだけども……。・しかも、運転手さんまでいるよ……。

「どうぞ。遠慮せず乗ってください。」

ニコニコと運転手さんが笑いかけてきている。ちょっと厳ついが、いい人そうだ。

「じゃ、じゃあ。お邪魔しますー……。」

中まで広い……。

「……。・お前、名はなんだ。」

「あ、あたしは美羽。よろしく。」

……。夜月って言って、極道だっということがばれたらややこしいから、名字は隠すことにした。

「あなたは？」

「……。・千歳。ちとせ。」

「そう。よろしく、千歳。」

ちなみに、あたしが敬語じゃないのは、おそらくこの千歳とか言う男は、あたしと同じ年ぐらいだろうと思っているからだ。あたしの

「何突つ立っている。早くしろ。」

「……そういう千歳のバックに見える工場らしき建物。以外に大きい。……でも、なんで聖夜はこの場所の地図を書いてあたしに渡したんだろう？……謎だ。てつきり、その地図に書かれているのは聖夜の家だとばかり思っていたのに……。とりあえずこの工場の中に入ってみることにした。入って正面にある、少し重たそうな扉を千歳が開けて、その先に見えたのは……。……たくさんの……。……人。しかも、ほとんどの人の頭がカラフルだというおまけつき……。しかし、そんな光景ものともせず、千歳はどんどん先に進んでいくので、あたしは急いで千歳のあとについていった。道行く人たちがそれぞれ千歳に挨拶をしてくる。それにたいして千歳は……。……。」

「……。……あぁ。」

「……。……ずいぶんなご身分みたいです……。……そんなにかいつ偉いのか？いやいや、それより聖夜はどこ……。……？」

「よっ！千歳！！」

「……。……あぁ。」

千歳が階段を上ろうとした時、一人の男の子が千歳に話しかけてきた。あれ？敬語じゃない？さっきまで千歳に挨拶してきた人たちは、皆敬語だったのに……。……そんなことを思っていたら、男の子がこっちを向いた。こげ茶色の髪に紫色のメッシュがあって、瞳も多分カラコンだろうと思われる、紫色の瞳。うーん……。……なんていうか、

「……さわやか系？しかもなんか、いかにももてそうな感じの。」

「あれ？千歳が女の子連れてくるなんて珍しいな……っていうか初めてじゃないか！？どうしたんだよ、病気！？」

「……………」

「……………なんだか失礼な人だな。でも、心の底から言ってそうで怖いんだけど……………」

「ねえ君、名前は？」

「……………美羽……………です。」

「じゃあ、美羽な！俺は瑛太。よろしくな！！」

「は、はあ……………」

ああ、笑顔が眩しい……………。

「……………入れ。」

「うん……………」

あれからしばらくしてあたしが案内された所は、2階の一番奥の部屋。……………ここに聖夜がいるのかな……………？

「ほら！！」

そういつて瑛太がドアを開けてくれた。……………最初に千歳が入っていったけど。気が使えないやつだなあ。千歳の後に、あたしも続く。

「ありがと、瑛太。……………お邪魔します……………」

ちなみに、瑛太はあたしよりも年上らしい。……………敬語はい

いって言うてくれたから、タメで話してるけど。そうしてあたしは足を踏み入れた。

・・・・・・・・あれ？

聖夜がいない……。そこにいたのは、2人の男の子だった。……
……なんかここ、男しかいないか？

「ただいまー！！」

部屋に入るなり、瑛太が大きな声でそういった。それに、オレンジの髪の男の子が答えて……。

「お帰りー瑛……太……。……え、誰？」

その声に、向こうを向いていたもう一人の金髪のお兄さんも気づいたみたいで……。

「うわっ！可愛いー！！だれが連れて来たの？瑛太か？」

「ちげえーよ。千歳だよ、ち・と・せ！！」

「……………」

「えええええー……………！！！！」

「……………」

……さっきといい今といい……。なんか、千歳が可哀想になってくるぞ……。……そんなに珍しいことなのか？

「とりあえず、みんな改めて自己紹介しようぜ！！」

「……………えっ！っていうか……。……聖夜は？ここにはいないの？いや、それよりここはどこ？あんた達なんなの……………です

か？」

なんであたし流されるがままなんだ……………。

「あれ。千歳言ってなかったのか？」

「……………ああ。」

「あーそうなんだ……………えっと、驚くなよ？」

「う、うん……………。」

なんだ……………？

「簡潔に言っと、俺たちは暴走族で、ここはその溜まり場なんだ。」

……………は？

暴走族って……………あれだよ……………？本当にそんなのあったんだ……………。

会えなくて

「つと、話がそれちゃったな。じゃあ、改めまして、自己紹介するか!」

「あ、うん。そうだね。」

少しの間、あたしは固まっていたけれど、瑛太の声で現実に戻ってこれた。……まあ、よくよく考えてみれば、あたしの家のほうが驚くべきことだしね。極道が存在するんだから、暴走族だって存在する……よね……?」

「んじゃあ、俺からな!俺は、やしろ えいた谷城瑛太。18歳で、鬼瀧学園の3年生な!よろしく!」

それに続いて、オレンジ髪の子がしゃべった。

「僕は、たからぎ なぎさ宝樹渚だよ!16歳で、同じく鬼瀧学園で1年生ね。よろしくね!」

オレンジの髪に、茶色の男にしては大きな瞳。瑛太はさわやか系だけど、渚はかわいい系……かな?

「俺の名前は、らんば はつき乱場葉月。17歳で、鬼瀧学園の2年生。趣味は「次、千歳だな!」」

……びっくりした。急に瑛太が大きな声出すもんだから。相変わらずにこにこしたままだけど……。

「………^{まえ ちとせ}間江千歳。17歳……2年生だ。」
「千歳は俺たちとおんなじ高校だからな！じゃ、次美羽の番だな！
！」

鬼瀧学園か……聞いたことない学校だな、まあ……そこまであたし学校について詳しくないから当たり前か。

「あたしは、夜月美羽。城が崎学園の高等部で、2年生。17歳。皆よろしく。」

うん。これでいいんだよな。……あれ？皆固まってる……なんで？どっかおかしかったか……？

「じよ、城が崎学園って……あの、お金持ち校の！？」

しばらくして、渚が叫ぶようにそう言った。

「お金持ち校……ああうん、そうだね。」
「すごかったんだね、美羽って……。あそこって、頭いい人しか入れないって聞いてたけど、本当にそうなの？」

葉月は他より冷静そうだな。

「うーん……基本お金持ちなら入れるけど……そうでない人なら……そうだね。確かに、頭がいい人じゃなきゃ入れないよ。」

お金持ち様たちは、試験もなしに入れちゃうんだよね。……あたしは、それがなんとなく嫌だったから、普通の人たちと一緒に試験

受けたけど。そんなことより、気になるのは・・・。

「皆、なんでそんなに城が崎学園にくわしいの？」

ここからは結構離れてるのにな・・・。

「そんなの、ほとんどの人が知ってるぜ？有名だからな！」

瑛太も、やっとこつちに戻ってこれたみたい。

「そうなんだ・・・知らなかった。」

「あははっ！俺たちのほうが知ってるって、なんか変な感じだな！
！・・・なあ、城が崎学園ってどんな感じなんだ？やっぱり中もす
っごいゴージャスなのか・・・？」

「んつとね」

「

それからあたしは、皆に城が崎学園のことについて聞かれるがまま
話した。・・・まあ、たいした話はできなかったんだけど。

「ねえ、ところで聖夜はどうしたの？っていうか、聖夜ってここに
来る？」

あたしが城が崎学園のことを話し出して、だいたい15分くらいた
った。あやうく、本来の目的を忘れるところだった、危ない・・・。
あたしの質問には、葉月が答えてくれた。

「ああ、聖夜は・・・もうすぐ来るはずなんだけど・・・遅いねえ。
・・・というか美羽は聖夜に会いに来たんだ？」

「うん、そうだよ。そしたら、ここに来る途中で千歳に会って・・・
千歳にここまで連れてきてもらったんだ。ね、千歳。」

「・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・聖夜は今日は遅くなるといつていた。」

「・・・それを早く言うてください、千歳さん……。っていうか、いたんだ……。千歳は話に加わってこないからなあ。」

「それって・・・・・・・・どのくらい遅くなるとか分かる？」

「・・・・・・・・・・7時くらいには来る。」

「そっか・・・・・・・・。」

7時、ね・・・・・・・・・・ヤバイかも。

「あゝ・・・・・・・・・・じゃあ、あたし・・・・・・・・また次の機会に来ようかな・・・・・・・・。」

「えっ！・・・・・・・・もう帰っちゃうの・・・・・・・・？」

ううっ！

渚・・・・・・・・そんな捨てられた子犬みたいな目であたしを見ないで・・・・・・・・かわいいけど・・・・・・・・。

「まだ4時だろ？もう少しここにいてくれてもいいだろ？」

「そうだよ。せつかく仲良くなれたんだから・・・・・・・・ね？」

・・・・・・・・うわっ！

葉月がすごいいいながらあたしに抱き着いてきた・・・・・・・・。ちょっ！普通、今日会ったばかりで抱き着いてこないだろ！！

「わ、分かった！！・・・・・・・・もう少しだけなら・・・・・・・・。」

あたしが折れると、渚は大げさに喜んだ。

「ほんと！？やったあー！！葉月、ナイス！！・・・だけど・・・」

「??？」

「・・・どうしたんだ？」

「・・・葉月。」

千歳が、葉月を睨んできた。・・・こわっ！！でも、そんな千歳にたいして葉月は笑みを深めた。

「・・・はいはい。わかったよ。」

そういつて葉月は、ゆつくりとあたしを解放してくれた。なんか話の流れがよく見えないけど、とりあえずありがとう、千歳！

「」

「」

そんな時、突然誰かの携帯が鳴った。

「・・・」

そして、無言で千歳がポケットから携帯を取り出した。千歳だったのか。・・・なんか妙にポップな音楽だったんだけど。まあ、それはともかく。メールらしい。・・・聖夜からかな？

「・・・聖夜は今日来れないらしい。」

やっぱり聖夜からか・・・。

「・・・そつか。じゃあ、また日を改めて来ることにするよ。」
「・・・送る。」

「いや。いい。・・・悪いし。」

なによりうち、極道だから。

「一人で帰れるか？」

「大丈夫だよ。ありがと、瑛太。」

「でも、ここ柄の悪い奴らばつかだよ？美羽は怖くない？」

「うん、全然。渚だって今まで大丈夫だったんでしょ？」

「いや、それはそうだけど・・・。」

・・・参ったな。本当に大丈夫なんだけど・・・。

「・・・じゃあ、せめて玄関くらいまでは送らせて？」

まあ・・・玄関までならいつか・・・。

「分かった。ありがと、葉月。」

「うん。どういたしまして。」

そういつて葉月はニコリと笑った。・・・皆いい人たちばかりだな。・・・でも困った。なにがって？そりゃあ・・・。

「ねえ、やっぱり家まで・・・。」

「だからいいって。迷惑かけちゃうし。ね？」

「・・・でも、迷惑なんかじゃないし・・・。」

そう言い合うあたしと渚。渚は多分本当にあたしのことを心配してくれているんだと思う。でも、今はその優しさが辛い。だって家が極道だってことは他人にはばらすなって、拾われた時からさんざん言い聞かされてきたことだし……。この事態をどう切り抜けようか……。話をそらす？……。いや、どうせすぐに元に戻されるに違いない。ちなみに、見送り(?)には全員ついてきた。なぜか。なのに、皆それぞれで話していて、誰一人としてあたしと渚の会話に加わる人はいない。誰か一人くらい渚を止めてくれたっていいのに……。あたしは心の中でそんな愚痴をこぼした。……。まあ、誰が悪いわけでもないんだけど。……。そして、階段を降りたところで、漸く葉月がこの延々と続く会話に終止符を打とうとしてくれた。

「渚。いい加減諦めなよ。美羽が困ってるだろ。」

瑛太も、それに続いた。

「そうだぜ？本人が大丈夫って言うてんだから、大丈夫だろ。きつと！」

……。瑛太、きつとはいらないから。絶対大丈夫だから。でも、そんな二人の説得の甲斐あってか、渚は渋々諦めてくれたようだ。渚には悪いけど、二人に感謝だな！！そんなことを思いながら、扉へと進んでいく。その途中下にいた人たちが、道を開けてくれた。それを、当然のように通り過ぎていく千歳・瑛太・渚・葉月……。そして、またふと疑問に思う。なぜ……。なぜこいつらはこんなに偉そうにしているのか。

「ねえ……。なんで、ほかの皆は、千歳たちに敬語なの？」

明らかに千歳たちよりも大人だろうと思われる人が、自然に千歳たちだけに敬語を使っているの、そこから聞いてみた。さすがに、なんでそんなに偉そうなの？って聞くと、嫌な感じに聞こえるだろうし。それには、瑛太が答えてくれた。

「ああ、それなら、俺たちがここの幹部だからだぜ！それで、千歳が副総長な！！」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ええええっ！！！！？

まさかの展開・・・？

「お嬢。お帰りっす！！」

「た・・・ただいま。海斗たちはまだ帰ってきてないよね？」

「はい！まだっすよ。・・・どうしたんすか？そんなこそそと・・・」

「なんでもないから。気にしないでいいよ。」

「？」

あたしは、夜月組のあきれるくらいデカい家が見えてくると、出て行ったとき同様極力人目を避けて、こっそりと入ることにした。海斗やお父さんに見つかる何言われるかわからないしね。でも、問題はこの立派な門を通り過ぎてから。家がデカいのに比例して、人の数も半端ない夜月組。自分の部屋にたどり着くまでに誰かにあつてしまうのは、やはりどこを通っても避けられない。まあ、会ったのが下っ端の人でよかったけど・・・。

やっぱりこんな心情で人に会うのは吃驚する。

吃驚といえば、皆が幹部・・・しかも、千歳が副総長なことのほうが驚いたけど・・・。あれからあたしはまだ渋っていた渚をどうにか説得して、一人で帰ってきた。みんなが幹部だったという事実は無理やり頭の中で納得させた。・・・でも、まさかあの地図に書かれている場所があんなところだとは思わなかったな・・・。楽しかったけど、結局聖夜に会うっていう目的は果たせなかったし・・・。まあ、また会いに行けばいいか・・・。ん？でも・・・そんな気軽

に行つていいところなのか？・・・まあ、いつか。皆悪い奴らじやなさそうだったし。行つてもそう怒られたししないよね。

・・・そうして無事何事もなく部屋までたどり着いたあたしは、次はいつ行けるだろうかと、次のこつそり抜け出す計画を考えていた。そして、15分後。

いきなりあたしの部屋への入り口から、ものすごい音が響いた。

バンツ！！！！

「！！？・・・か、海斗・・・。」

「美羽！ただいま！！俺がいなくて寂しかったか？」

「いや。別に。」

「そうかー寂しかったか！俺も、美羽がいなくてさみしかったぞ！

！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、そう。」

そういうなり、海斗は思いっきりあたしに抱き着いてきた。もうどうにでもしてくれ・・・。

「海斗。離れてほしいんだけど・・・。」

「お？ああ、悪い悪い。」

「？」

今日はやけに素直に離してくれるんだな・・・。そう思つて訝しげに海斗を見ると、海斗は妙に上機嫌そうな顔で言った。

「美羽。今度の日曜日。一緒に遊びに行かないか？」

今度の日曜日か……。うん……。まあ、暇だし。

「いいよ。……暇だし。」

「……えっ！？本当か！？」

「うん。」

「……美羽っ！！」

そして、本日2度目。また抱きしめられた。……。しかもめちゃくちゃ強く。

……。っ！

く、苦し！！死ぬ……。。

生命の危機を感じて力ある限り、海斗を突き飛ばして少し息を整える。今までもこういう展開はいくらでもあった。本当に海斗には反省してもらいたい。

「と、ところで！！」

「？どうしたんだ？」

「どこに行くの？」

そついうと、海斗はにっこりと笑って……。

「それは内緒だ。」

結局教えてはくれなかった。そうだ、こいつはこついう奴だった。

所狭しと並んでいる家やビル。たくさん行き交う人で、その道には音が鳴りやまない。だが、そんな雑音にも負けなくらい大きな声で言い争う2人がいた。

「まったく、なんでお前までついてくるんだよ!？」

「うるさい!近くで叫ばないでよ!そんなの美羽が心配だからに決まってるでしょ!！」

「美羽には俺がいるだろ!お前はお呼びじゃねえんだよ!！」

「あんたがいるから余計に心配なのよ!」

「んだとお!？」

「なによ!！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

今日は日曜日。日にちが経つのは早いもので、すぐにこの日はやってきた。ちなみに今日は、遊園地に行くらしい。目的地まであと約10分。あたしたちが家を出てから今いるところまで、約30分。海斗と樹は、家を出てからずっとこんな感じだ。なぜ樹がいるのかというと、あたしが携帯で樹に今日遊びに行くことを伝えたから。そしたら、なぜか樹までついてきたのだ。あたしは別に全然かまわないし、むしろ樹がいてくれたら楽しいと思う。ただ、この2人がそろくと、こちら側としては迷惑極まりない・・・というか、疲れるといふか・・・。なので2人には悪いが、極力2人の後ろで他人のふりをして、関わらないようにしていた。まったく、この2人もこんなに顔を合わせるたびに喧嘩してよく飽きないよなあ・・・。いつそ感心するよ・・・。

あたしは2人にばれないように、今日何度目かもわからなくなったため息を吐いた。

「すごい……」

「だろ！？俺、一度ここにきてみたいと思ってたんだよなあ。」

「私はもう来たことあるけどね。」

「え！？そうなんだ。」

「うん。お父さんの仕事のついでだけど。」

そんなことを喋りながら、あたしたち3人はこの広大な遊園地の中へと足を踏み入れていく。

遊園地の真ん中には大きな観覧車。その周辺には絶叫系の乗り物がたくさん。そして、そこかしこにあるホラーハウスやカラクリ屋敷つばいのや食べ物屋などなど。

実は、遊園地自体片手で数えるほどしか来たことがないけど、こんなに大きな遊園地は初めて見た。思わず、感嘆の息が出てしまうほど立派なところだった。周りは、休日なこともあって人で溢れかえっている。

「よしっ！じゃあまず、あれから乗りに行くか！！美羽、行くぞ。」
「うん。樹もっ。」

海斗は、はぐれるといけなからとあたしに手を差し出してきた。あたしも、それには素直に従い樹にも手を差し出した。海斗が顔をしかめたのは見ないふりで。そしてあたしたちは、とりあえず片っ端から乗ることにした。絶叫系のを何回か乗って、少し休憩。そして次は、屋内のアトラクションを楽しんでから1時くらいに昼食をとり、また乗り物へ。さすがに疲れてきたので、あたしたちは近くの休憩場で休むことにした。

「美羽。大丈夫？」

「う、うん。」

「俺、なんか飲み物買ってくるな。」

「うん。ありがと。」

・・・あたしたちっていうか、主にあたしが疲れたんだけど。そんな時ふと見た視線の先に、忘れられない後姿があった。
あ・・・あれて・・・。

「!!!!」

「!?!?・・・み、美羽!?どうしたの!？」

「ごめん樹。ちよつと待ってて。」

「ええ!?!?ちょ、美羽!？」

あたしは勢いよく立ち上がり。頭で考えるよりもはやく、駆け出していた。あ、あれって・・・もしかして・・・?い、いや。でも・・・人違いかも・・・遠かったし・・・でも・・・!ああ、くそっ!!この人込みでは、どんなに思いっきり走りたくても、人の波に吞まれてそれが叶わなかった。
そうしている間にも、だんだんとあの後姿はこの人だかりに紛れて見えなくなっていくてしまう。

「・・・っ!?!・・・す、すみません!?!」

途中で、何度か人にぶつかりながらも、どんどん進んでいく・・・が、駄目だった。あたしは、いったん諦めてとりあえずこの人ごみの中を抜けることにした。

「はあ・・・。」

なんともいえない絶望感に、あたしはため息を吐くことしかできなかった。そうこうしているうちに、2人の見知らぬ男が近寄ってきた。・・・いかにもチャラそうな。

「ね、君一人？なら、俺たちと遊ばない？」

はあ、またこの展開か・・・。

「いえ、ごめんなさい。友達ときてるので。」

「そつか・・・はぐれちゃったの？一緒に探そうか？」

「いえ。大丈夫です。邪魔してごめんなさい。それでは。」

邪魔はしてないけどね。あたしはニコリと笑顔を作った。・・・だめだ顔疲れてきた。だいたい今は笑顔になれる気分じゃないしさ。そしてあたしはなるべく自然にこの場を離れ・・・られなかった。うん、大丈夫。想定済み。

「・・・つ。ちょ、ちょっと待つて！一人じゃ危ないからさ。ね？」

いやいやいや。ここにいる方が危ないって。何？「ね？」って？何がね？なのさ。意味わかんねえ。っていうかあんた達そんなに慌てて・・・本当はこういうの慣れてないのか？

そんな時、ふとどこからか視線を感じた。いや、視線はもうずっとこの状況のせいで受けてるんだけど、そんな優しいものじゃなくて・・・。悪意の籠められた視線。あたしはこの2人の男に対応しながら、こっさりその視線の場所を探っていた・・・そんな時だった。

「ごめん。待たせた？」

「「「え？」」」

いきなり聞こえた声に、そちらを振り返ってみると……そこにはあたしがさつきまで探していた姿……聖夜がいた……。というか、ハモってしまったではないか。この男2人組に……。って、え？あれ……。いない。

「もう2人ともどこかに行っちゃったよ」

ええ！？早！！逃げ足だけは早いとはまさにこのことか？……。ま、そんなことはどうでもいいか……。

「ありがと、助かった。……でも、どうしてこんなところに……？」

「ああ……偶然だよ。でも良かった、間に合って。たまたま通りかかった人たちの話聞いちゃって……。『長い黒髪の、とてもきれいな子がナンパされてる』って言ってたから、気になって来てみたんだ。もしかしたらって。」

「そうなんだ……。」

そんな偶然もあるんだなあ……。とりあえず聖夜に会えたんだから、あの2人には感謝すべきかな？

「ところで、美羽は1人で来たの？」

「……。……。あ。」

そ、そうだ！！忘れてた！！

「ううん。海斗と樹と3人で。あ、樹っていうのは、あたしの親友

のこと。」

「そつか。戻らなくて大丈夫なの？」

「・・・わかんない。」

「じゃあ、一緒に戻ろうか。どこにいるか分かる？」

「えつと確か・・・休憩所。観覧者の近くのところ。」

「ああ。分かった。はい、はぐれるといけなから。」

「えつ、う、うん。」

そうしてあたしたちは、海斗たちの多分待つてくれているだろと思
われる休憩所へと向かっていった・・・はぐれないよう手もつ
ないで・・・な、なんか恋人みたい・・・。一度そう思うと、
途端に恥ずかしくなつてきて、顔をあげられなかった。ああ、でも
よかった・・・あたしだけだと絶対に迷子になつてたような気がす
る・・・。ここから休憩所までは結構な距離がある。・・・つてこ
とは、あたしも結構な距離を走つてたんだなあ。自分でも吃驚。そ
の道中あたしは、ずっと聞きたかったことを聖夜に聞いてみるこ
とにした。

「そういえば、聖夜も・・・その・・・ば、暴走族・・・なの？」

「そつだよ。・・・怖い？」

「ううん。怖いなんて絶対に思わないよ。・・・それに、あたしの
家・・・あれだし」

それに、いい人たちばかりだったからね。

「そつか・・・千歳たちにはもう会つたんだよね？」

「うん。・・・幹部だつてことには驚いたけど・・・もしかして、
聖夜も幹部なの？」

勝手にあんな場所教えられるくらいだからな・・・。

「うーん．．．幹部っていうより、総長．．．かな。」

「へー．．．で、え？．．．．．そ、総長．．．？」

「そ。あの暴走族、神龍っていうんだけど、その所謂一番偉い人分かる？」

「う、うん．．．なんとなく。でも．．．。」

．．．でも、聖夜が総長．．．な、なんか、結びつかないな．．．。

「．．．美羽。ちよつとあっちに行こうか。」

「え？．．．ええ！？ちょ、聖夜！？」

そうしてあたしたちが向かった．．．というか、あたしが聖夜に引っ張ってこられたのは、さっきの人込みとは打って変わって．．．人っ子一人いない、とても、とても静かなお店の裏側。その壁に、聖夜はあたしを優しく押し付け．．．。

．．．．．お、押し付けた．．．．．？

「．．．え、せつ．．．聖夜．．．！？」

え．．．なんで？なんでこんなことになってるわけ！？あたしに寄り掛かるようにして、聖夜がこちらに少しだけ体重を預けてきた。

「．．．．．っ．．．せ、聖夜？」

「しっ．．．．．ちよつと黙ってて。」

聖夜は静かにそういつて、あたりを注意深く見渡している。

．．．．．！！

・・・まただ・・・。また・・・さっき感じたのと同じ悪意の籠められた視線があたしを貫く。場所は・・・あつ!・・・あそこだ。聖夜もこの視線に気づいてたんだよな・・・。

「聖夜・・・あの木と建物の裏側・・・5人くらいだと思う・・・。」

あたしがそういうと、聖夜は少し驚いたみたいに目を見開いた。あたしは昔から、人の気配とかを読むのは得意だった。・・・まあ、昔からって言っても、海斗たちの家族になってからだけど・・・。そんなことを思っているうちに、さっきの視線の主の男たちが、あたしたちの前に姿を現した。

「・・・お前、その女。・・・夜月の娘だな?」

・・・。。。
はあ・・・メンドイ。

実際こういう場面はもう何度も経験済みなので、それほど驚かない。多分、夜月組の誰かに恨みを持つてる人たちだろう。・・・それとも、あたし自身か・・・。どっちにしろ、聖夜を巻き込んでしまうのはいただけない。

「聖夜。・・・下がってて・・・。」

・・・すぐに終わらせてやる・・・。。。。そうしてあたしが一歩踏み出そうとすると、なぜか聖夜に阻まれた。

「・・・っ!? 聖夜!?!」

「美羽はそこで大人しくしてて。」

「でもっ！」

「いいから。」

・・・・・・・・・・・・・・・・っ！

聖夜の瞳がまっすぐにあたしを見る。・・・その中に含まれる威圧感に、あたしは逆らえなかった。それから聖夜は男達へと視線を戻した。それと同時に、今までのなんだったのかというほど聖夜を取り巻く雰囲気が変わる。・・・思わず立ち竦んでしまうほどの雰囲気。それだけで、聖夜の強さが見て取れた。男共がそろいもそろって息をのむ音が聞こえた。

・・・・・・・・大丈夫だ。聖夜は負けない・・・・。

それはもはや確信だった。絶えることなく与えられる安心感が、さつきまでの不安を取り除いてゆく。そして沈黙を守り続けていたその場合は、一筋の風が吹くと同時に一気に騒がしくなった。

そして結果的には

「……強い。一人ひとり、最小限の動きと力で確実に倒していく聖夜。体格も数も明らかに相手の男たちのほうが有利なのに、聖夜が負けるなんて選択肢すら浮かんでこないほど。そして、小さな乱戦はものの5分もかからずに終わった。」

「聖夜っ。……怪我はない？」

「うん。大丈夫だよ。」

「そう……ごめん、巻き込んだじゃって。聖夜は何も関係内のに。」
「いって、気にしないで。……それに、これは俺の意思で動いただけだから。」

「……ありがとう。」

そう言った後、あたしは倒れている男たちのおそらくリーダーだろうと思われる男のところへと足を運んだ。

「……何が目的？」

「……っう……。誰が……言つかよ……！」

「……個人的な恨みとかじゃ……なさそうだな。……組織みか……。」

そういった瞬間、男が息をのむ様子が窺えた。どうやら、その線で間違いないらしい。

「……どこの組の奴？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それきり男は黙ってしまった。まあそれをいつちゃあ、今度は仲間に何されるかわかんないかもしれないねえな……。……。お父さんたちに伝えた方がいいか……。

「もうあたしたちの前にその面出すなよ。」

こんなところでいつまでもこんなことやってても何にもならない。あたしと聖夜は、男たちをそのままにその場を後にした。

「!?!?・・・・・・・・美羽!?!」

数分して、漸く海斗たちと合流できた。どうやら、樹と海斗はずっと待っていてくれたらしい。……。というか、迷子センターに海斗が行こうとするのを、樹が止めてくれていたらしい。微妙に樹の息が上がっている。聖夜を追いかけていったのは後悔してはいないが、少しだけ反省した。

「ごめん。遅くなって。」

「ほんと。どこに行ってたの……。あなたは?」

やっと2人とも聖夜に気づいたらしい。そつか……。海斗はこの前会ったけど、樹は聖夜の顔とか知らないんだ。

「和泉聖夜です。美羽の・・・友達。」

『友達』というまでに少しだけ間があつた聖夜。そうだな・・・まだ数えるくらいしかあつたことないし・・・そう考えると、あたしと聖夜って微妙な関係なんだな・・・そして、少しだけ目を見開いてあたしと聖夜を交互に見る樹。・・・そういえば樹には前に聖夜の話したことあつたんだっけ・・・。

「なんだ友達か・・・つまんないの。」

・・・・・・樹・・・。なんか明らかに落胆した目であたしを見ないで。

「てめえ・・・美羽に何かしたんじゃないだろうな・・・。」

そんなことを言いながら聖夜を威嚇する海斗。

・・・・・・海斗・・・。そんなこと言ったら聖夜に失礼だろ。

「何もしてないし、現在進行形で美羽に抱き着いてる君に言われたくないよ。」

そう海斗に言い返す聖夜。

・・・・・・聖夜・・・。き、聞かなかったことにしよう。いちいち反応してたらきりがない。

周りがあたしたちを見ていろいろな反応をしている。目立ってんだろうな、あたしたち。まあ、人があんまいないところでよかったよ。そしてあたしたちは、ただ一人反対する海斗を押し切ってっ聖夜も一緒に、帰りまで遊ぶことにした。

そして…………。

現在、午後6時。観覧者にて。

その観覧者の中には、何故かあたしと聖夜の二人しかいなかった。

「美羽、大丈夫？……って、あれだけ遊べば疲れるのも当然か。」

「う、うん……。今日はありがと。あと本当にごめん、巻き込んだじゃって……。」

「まだ気にしてたんだ？……あの事なら、俺も美羽も何ともなかったんだし、本当に俺のことは気にしないで。」

「…………うん、ありがと…………。」

ちなみに、海斗と樹は外で待機中である。今も観覧者の窓から見下ろせば…………。口喧嘩をしている。つくづく元気な二人だと思ふ。できればあたしもあそこに戻りたい…………まだ乗ったばかりだけ。

…………え？なんでかって？

…………そりゃあ…………。

「…………。」

…………あたしは、こういう沈黙する場面が苦手だからだよ。や

ベーよ、もうどうしたらいいんだ。シーンとしすぎてて物音ひとつ立てれねえーじゃねえか。やばいやばいやばい……。心が折れそうだ。精神が崩壊しそうだ。観覧者つて、外の景色眺めて心身ともに休めるところじゃなかったか？もう、なんていうんだろ……。冷や汗（？）がだらだらだよ。ここの遊園地にはいろいろな乗り物があるけど、そうやらこの観覧者がメインの乗り物らしくて、その・かなり、かなーりデカい。イコール乗っていられる時間も増えるわけで……………。

……………。

駄目だ。無心になろう。こんな沈黙が後何分も続くと思うだけで……………じ、地獄だ。

くすつ……………。

そんなことを思っていると、いきなり破られた沈黙。そして、誰かの笑い声。この中には今、あたしと聖夜しかないわけだから……。あたしは、ちらつと聖夜を見てみた。そこには、何故か笑いを必死にこらえている聖夜の姿が……………。

「……せ、聖夜……………？」

「あはは……………はあ……………ごめつ……………あまりにも面白かったから、つい……………」

「？」

な、何が……………？

「美羽、内心すっごい慌ててたよね……………？それが顔に出て……………可愛かったよ。」

「・・・・・・・・・・っ・・・・・・・・。」

「顔真つ赤。・・・本当に可愛いな・・・。」

その言葉で、さらに顔に熱が集まっていくのが自分でもわかって、顔を上げていられなくなつた。つていうか聖夜なんか・・・口説きなれてる？その直後、いきなり揺れた観覧者の箱の中。少し吃驚して、つい顔をあげてしまった。そしてすぐ目の前に見えたものは、整つた聖夜のきれいな顔、ところどころはねているけど艶のある銀色に輝く髪、ニコリと細められた青い瞳。あたしは再び慌てて顔を俯かせようとした。

・・・・・・・・が、

寸前で聖夜に顎を捕まえられて、強制的に元の位置に戻されてしまった。ちょうどそのとき、あたしたちが乗っている観覧者は半分を過ぎた。

「せ、せせ聖夜・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・・・なに？」

「はは離してっ。」

「駄目。」

「・・・・・・・・・・っ!聖・・・」

「もう黙ってて。」

そういうと、聖夜はさらにあたしとの距離を詰めてきた。・・・やっぱり聖夜って不思議だ……。行動が読めない……。そして聖夜はあたしの首筋に顔を埋めてきた。

「・・・・・・・・・・美羽。」

「・・・・・・・・・・なっ、なに・・・？」

突然低い艶のある声で名前を呼ばれる。聖夜の息が首筋にかかって
少しくすぐつたい。

「美羽は俺のこと……好き？」

「……え……う、うん……」

いきなりの質問にちよつと戸惑ったけど、そんな質問ならあたしの
答えは決まつてる。嫌いなわけがない。……その『好き』が
likeの方なのかloveの方なのか、何を表すのかはわから
ないけど……。

「……好きだよ、聖夜。」

これが、あたしの気持ち。きつと、会ったその日から好きになつて
た……。最初はただ純粹に会いたいつて思ってたんだけど
たのに。いつしかそれは自分でもわかつてしまうくらいの恋心にな
つていつて。改めて今日、聖夜が好きなんだって実感した。

「……俺も、美羽が好き。」

その言葉を聞いた瞬間、涙が溢れそうになって必死で堪えた。笑い
たいのに泣きたくなるような……今はただこの想いを大切にしてい
きたいと思う。

「……ねえ美羽。」

「ん？」

「キスしていい？」

「うん……え。は？」

……な、何この急展開。なんか勢いでうんって返事しちゃったけど……。いや、あたしは別に構わないんだけど……。やっぱりちょっと恥ずかしいかも……。

「……………っ！」

「……美羽？」

ぎゃー！やめろ、そんな声であたしを呼ばないで！！聖夜が顔を覗き込んできたけど、あたしは思いつき目が泳いでいる。ヤバイ、まともに目が合わせられない……。なんかもうこんな自分が嫌で泣き出しそうになってくる。そんなことを思っていると、突然聖夜に顔を両手で包まれて上を向かされた。

「……………んっ……。」

え……………これ……き、キスされてる……？

「……………っ！せ、聖夜……！？」

「うんって言ったのは美羽のほうだよ？……それに、もう抑えられそうになかったから。」

そしてなんやかんやで恋人になったあたしたちでした。

宝樹兄妹

ごめんね・・・。

『どうしてそんな顔するの？』

もう・・・辛い思いなんかさせないから。

『ねえ・・・笑って？』

うん、笑うよ・・・だから心配しないで・・・。

これからずっと・・・ずっと・・・。。

守るから

遊園地から帰った次の日。今日からまた学校だというのに、あたしの精神は疲れ切っていた。

「はぁ・・・疲れたあゝ・・・。」

「美羽？どうしたんだ？」

「・・・別。」

独り言を呟いただけなのに、何故か、いつの間にか隣にいた海斗。はつきり言う。疲れたのは海斗のせいだ。

あの後・・・あたしと聖夜がああの観覧車、最初は四人で乗るつもりだったんだけど、なんかあたしたちいつの間にかいろいろ買っちゃって・・・荷物番が必要になって、その荷物番はじゃんけんの結果樹に決まったんだけど・・・。やっぱりあたし的には樹だけっていうのは心配で・・・いや、だってね？前に樹と買い物に行ったとき、あたしちよつと買いたいのがあつて『ここで待ってて』って言うて買つて戻つて来てみたら・・・樹いなくなつてたんだぞ！？しかもその理由が・・・暇だったから、と来た。これは心配するだろ！ナンパもされてたみたいだったし・・・。

まあ、そんなこんなで、樹はすつごい不満そうな顔してたけど、さすがに女の子一人残すのは心許ないってことで・・・何故か海斗と聖夜だけがじゃんけんして・・・ま、聖夜が勝つたってことだな。

因みに、海斗と聖夜の二人でじゃんけんしたのは、『男二人で観覧者なんかに乗りたくない』・・・だからだそうだ。

あゝ話が長くなっちゃったな・・・えゝと、それで海斗が駆け寄っ

てきたところまではまあ想定内だったんだけど・・・。

聖夜が・・・・・・・・・・ね・・・・・・・・・・。

『あ、俺たち今日から恋人になったから』

そういうと、聖夜はあたしを抱き寄せた。恥ずかしいやらちょっと嬉しいやらで、恐らくあたしの顔は真っ赤になっていただろう。

『ちよ、聖夜！？』

『・・・・・・・・・・はああああ！！！？』

・・・すごいね海斗と樹の叫び声（？）で、周りの人たちがこちらを注目した。

は・・・・・・・・・・恥ずいっ！！

そんな周りの視線すらも気にならないのか、二人はあたしに詰め寄ってきた。

『ちよ、美羽！・・・・・・・・・・本当なの？』

『違うよな！？』

『え・・・・・・・・・・い、いやあ・・・・・・・・・・その・・・・・・・・・・。』

『本当だよ？』

『お前あんたに聞いてねえ（ないわ）よ！！！！』

・・・・・・・・・・おお・・・・・・・・・・ハモった。そりゃあもう見事に。というか

樹はどちらかという応援してくれていたんじゃないのかな。まあそれは置いて。そのあと、聖夜と別れた後もずっと質問攻めにされたってわけ。

．．．．．本当に。

．．．．．疲れた．．．．．。

そんな気持ちのまま、あたしは学校へと向かっていった。学校でもいろいろと気が抜けないんだよな．．．家のこととかの話題は極力避けなきゃいけないし．．．．．。あ、今日は部活だから帰り遅くなるな．．．。ただでさえ疲れてるっていうのに．．．。

因みにあたしは、部活をいくつか兼部している。今日は．．．陸上。海斗は今日は顧問の先生が出張かなんかで無くなったらしい。樹は部活やってないしな。今日は一人で帰宅か．．．まあ、その方が自分のペースで歩けるからいいけど。

校門に入って廊下を歩いていると、皆挨拶してきてくれる。こういうところも、この学校のいいところなんだよな．．．なんかこう．．．全体の雰囲気を感じる？お金持ちとかそうじゃないとか関係なく仲が良くて．．．微笑ましい限りで。そんなことを考えながら、朝のＨＬが終わりいくつかの授業を終えていく。

．．．そして、部活の時間になった。

「美羽さんっ！！頑張ってー！！！！」

「夜月ー！あともう少しだぞー！！」

そんないろんな部活見学者等々の声援ももらいながら、走っていく。今日は、校内をぐるっと二週して終わり。・・・・・・簡単に言ってるけど、これが結構きついんだよな。・・・・・・この学校、一応金持ちが来る高校なだけあって無駄に面積が広いから。しかも二週って・・・・。そんな愚痴を心の中でこぼしながら、あたしは二週目に入って行った。そして、ちょうど校舎付近を走っていたころ。

「先輩っ！危ないっ！！」

「・・・・・・っ！！」

「キヤアアッ！！！！」

頭上から植木鉢が落ちてきて、そこであたしの意識は途絶えた。

「では、お大事に。」

「ありがとうございます。」

ここは病院。その後、上から落ちてきた植木鉢を避け切れなくて左腕にけがをしたけど、幸いあの植木鉢が頭に直撃することはなかった。保健室で診てもらって手当はしたけど、一応骨折とかしていないか診てもらった方がいいということ、至急先生の車でこの病院へと送ってもらった。因みに植木鉢は、教室で走り回っていた時に

その一人が植木鉢にぶつかって、誤って落としてしまったんだそう
だ。後でものすごい勢いで謝られたけど、まあ過ぎてしまったもの
はどうしようもないし、別に怪我也大したものではなかったの。今
度からは気を付けてくださいな程度で済ませた。

まあ、出血は酷かったから焦ったのかもしれないけど。

もう診察が終わったので、これから帰るところだ。先生には仕事もあるし、帰ってもらうことにした。・・・あのまま送ってくなんて言われたら逆に困るしな・・・。海斗には、携帯で遅くなるとだけ伝えておいた。怪我したなんて言ったら速攻でここに来て騒ぎ出すだろうし・・・それだけは避けたい。

そんなことを思いながら、病院の出口へと向かっていく。

・ ・ ・ ・ ・ この病院も結構デカいんだよな ・ ・ ・ 建物は見上げると首が痛くなるくらい大きいし。建物の外には緑が程よくあって ・ ・ ・ 本当に清潔な感じ。

「……ついでに……」

そんな時、どこからかすかに女の子の声が聞こえてきた。あたしは聞き間違いかと耳を澄ましてみる。

\bullet

なんだ・・・やっぱり聞き間違いか？幻聴でも聞こえたのかな・・・ここ最近でものすつごい疲れたし・・・。そうしてあたしは足を踏み出そうとした。

……が、それは直後に聞こえた例の声がきっかけで止ま

ることになった。

「やめっ！．．．．．っやめてください．．．．．っ！！」

「騒ぐなっつつてんだろ！！おいっ、口塞げ！！」

「~~~~っ！！」

建物の陰からだ．．．。女の子と、男が二人くらい．．．．．。．．．．．ま、なにせよこんな場面見ちゃったら助けないわけには
いかないよな。

「早くどっちか選べよ。金全部出すか俺らに．．．。」

「何してんの。」

「だからっ！．．．．．は．．．な、なんだお前！！」

「俺らは今取り込み中だから、あっちに行ってるよ！！」

あたしがいきなり話に割って入ってたから、男二人と女の子は驚
いたみたい。

「情けないとか思わないの？．．．男二人で寄ってたかって女の子
苛めちゃってさ。」

そっいつてちらつと女の子のほうに視線を向ける。

．．．．．？あれ．．．なんかどっかで見たことある顔だな．．．
？

そう思い必死に記憶を巡らせていたらが、それは直後に聞こえた怒
声で遮られた。

「んだとっ！！」

「お前には関係ねえだろ!!」

そういうと同時に男二人は一斉にあたしに殴りかかってきた。そして、女の子を捕えていた手が外された。チャンスと思い、あたしは攻撃を軽くかわしながら女の子に向かって声を飛ばす。

「早く逃げて!!」

そういうと、女の子はハツとしたように立ち上がって、どこかへと走って行った。さて、人呼ばれたら面倒だし……さっさと片付けるか。

「てめえっ……。」

あたしが女の子を逃がしたことにより、男二人はさっきよりも思いつきり殴りかかってきた。まあ、その程度簡単に避けれるけど。

「ところで、なんであんなことしてたわけ？」

「はぁ!!? お前には関係ねえだろ!!」

「……ま、どうでもいいけど。どうせくだらない理由だろうし、っと。」

こいつらには何を言っても無駄だと確信したので、気絶しない程度に殴って帰らすことにした。

「……っな!？」

「ぐあっ!!」

……弱い。口ほどにもないな。

「・・・・・・・・まだやる？」

「・・・・・・・・ッ」

「てめえっ・・・・・・・・っお、覚えてろよっ!!」

そういつて男二人はよろよろと去って行った。というか覚えてるよなんて言う人はさすがにいないだろうとは思ってたのに・・・・いたよ。

そしてすぐ、さっきの女の子が現れた。

「・・・・・・・・!!お、お姉ちゃん!!」

「どうしたの？」

心配してまた来てくれたのかな・・・・？よく見てみると、とてもかわい子だった。色素の薄い茶色の髪に、茶色の大きな瞳。中学生くらいだと思う。

・・・・にしてもやっぱりどこかで見たことあるような顔つきだな・・・・。

「・・・・・・・・？お姉ちゃん、さっきの人たちは・・・・？」

「ん？ああ・・・・もうここにはいないから。大丈夫だよ。・・・・怪我とかない？」

「あ、はい・・・・あの！さっきはありがとうございました!!」

そういつて、ガバッと効果音が付きそうなくらいの勢いで頭を下げられた。

「お礼に何か・・・・。」

「風波!!!大丈夫・・・・って、え!?美羽!？」

え・・・・な、なんで渚・・・・!？

つて・・・・・・・・あ・・・・・・・・。

その時あたしは、この女の子は渚に似ていたんだとふと思った。

「美羽っ！本当にありがとう！！」

「い、いや・・・・・・・・ほんといいから、お礼なんて・・・・・・・・。」

あたしは今、渚の家にいる。家の中は、とっても明るくて生活感があつて・・・・・・・・あの家に慣れてしまったあたしとしては、なんか新鮮な感じがする。なんでいるのかというと、あの後この宝樹兄妹に半強制的に連れてこられたからだ。因みにあの渚の妹の名前は、ななみ 凧波ちゃんと言らしい。

「なぎ兄ちゃん！お菓子持ってきたよ！！」

「あ、ありがとう凧波っ！！」

・・・・・・・・それにしても仲のいい兄弟だな・・・・・・・・。なんか微笑ましい。自然と他人の気持ちも和やかにさせる・・・・・・・・二人揃うとさらにほわわ〜とした空気が流れているような気がする。

「みうおねえちゃん！！どうぞっ！！」

「あ、ありがとう・・・・・・・・。」

まあ、癒されはするんだけど・・・・・・・・このテンションにはついていけ

ない……。

「美羽……本当に何もされてないの？」

「うん。」

「ごめんねみう姉ちゃん……私のせいで……。」

「き、気にしないで！勝手にあたしが首突っ込んだだし、風波ちゃんに何もなくてよかったよ！！……それより、どうしてあんなことに……？」

「あ、うん……あれは私が走ってたらぶつかっちゃって……。」

「……それだけで？」

「うん……。」

そんなことであんな……本当にくだらない。もつと大人になれないのかよ……。ま、とにかく何事もなくてよかったか。

「ところで、美羽はなんであんなところに居たの？」

「ああ……ちよつと部活中に腕怪我しちゃって、これ。」

そういつて、左腕の包帯を巻いてある所を持ち上げる。因みに、あいつら男二人組は足と右腕を使って倒したんだ。

「そうだったんだ……それでその怪我……。大丈夫なの？痛くない？」

「うん。そんな見た目程たいした怪我じゃないから。」

「そっか、よかったあ……。でも、どうしてそんな怪我しちゃったの？」

う……。なんかさつきから質問攻めにされている気がするのあたしの気のせいかな？

「えっと、校舎の近くを走ってた時に上から植木鉢が落ちてきて・
・あたしが避け切れなかったから・・。」

「えええ！？だ、大丈夫だったの？そんな・・。」

「だから大丈夫だって。骨折だっしてないし、ほら。」

「・・。」落とした奴らは見つかったの？」

あれ・・。なんか声のトーンが下がったような・・。下がらなかった
たような・・。渚俯いてるから顔がよく見えないからわかんねえ
な・・。

「うん。向こうから誤って来てくれた。不注意だったさ。」

「・・。」それで、美羽はあっさり許したの？」

「まあ・・。過ぎちゃったことはもう何言ったってしょうがないし・
・。」

そうあたしが言うと、渚はやっと顔をあげてくれた。

「そっか・・。美羽は優しいんだね・・。僕、美羽のそういうところ
好きだよ！！」

慈しむような笑みから、満面の渚らしい笑みへと変わっていった渚
の表情。不覚にも少しだけドキツとしてしまった。

「あ・・。ありがとう。」

「あれ？美羽ったら照れてる？可愛いー！！」

「照れてないってば！」

お願いだからもう勘弁してください。そういうの苦手なんですって
あたしは・・。そしてあたしと渚は、途中から風波ちゃんも会話
に加わって3人で他愛も無い話をした。なんで渚たちがあんな病院

にいたのかは気になったけど、渚はあんま聞いてほしくなさそうだったので、聞くのは断念した。

そして、そろそろ帰ろうというとき。
前にもあったような光景が今度は違う場所で繰り広げられていた。

「今度こそは、家まで送らせてもらっからねっ！」

「だ……だからいって、そういうのは。」

……まあ、ある程度予想はできていたことなんだけど……。

「よくないよっ！ 風波を助けてくれたお礼も兼ねてさっ！ ね？」

いやいやいや！ だからそんな目で見つめられても駄目なものは駄目だから。あたしはその手にはもう引っかからないから。ど……どうしよう……これもある程度は予想できていたんだけど、一向に渚が引いてくれる気配がない。

……終いには……。

「なぎ兄ちゃん！ 私も送っていきたい！！ みう姉ちゃん、いこっ？」

「い、いや……そこまでしてもらっわけには……。」

「何言ってるの美羽！ 僕たちが送っていきたいんだから、お願い！
！送らせて！！」

ひいひい！！

い、威力が二倍になった……。よし、ここは少しだけ、少しだけ食い下がるう。

ただし……。

「じゃあ、途中まで・・・いい？」

これ以上は絶対に食い下らないぞ！

・・・そして、空が赤く染まり始めてきた頃。あたしはやっとどうにか二人を説得して、途中までということになった。
・・・だが、例のやり取りはぎりぎりまで続く・・・。

「美羽・・・本当にここまで大丈夫なの？」

「うん。もうすぐ近くだから。」

ごめんなさい。嘘です。ここから歩いてても、玄関には何十分とかがります。・・・いや？家自体はもう見えてるんだけどね？何せうちには縦に大きいんじゃないかと横に大きいからさ、面積無駄に使ってるしな・・・家は見えても、そこからがまた大変なんだよな・・・。

「ならどうせだから最後まで送らせてよ。」

「い、いや・・・それは悪いし、渚たちも早く帰らないと親の人が心配するよ？」

さつき渚の家に行った時に見た、穏やかでおっとりとして・・・とにかく優しそうなお母さんだった。そんな人に迷惑をかけたくない。それにまた風波ちゃんがかどうかの誰かに絡まれないとも限らないし・・・可愛いからな風波ちゃんは・・・渚もだけど。

ふと、渚のお父さんってどんな人なんだろうって思う。そして一番思い描く渚のお父さん像・・・優しそうで、どっかというところ可愛い系で・・・渚や風波ちゃんともよく遊んでそうなイメージ。自然とそんな人が頭に浮かんできた。

「・・・・・・・・美羽ってさ、なんか妙に自分の家の場所とか隠してるよね・・・・・・・・」

「う・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・隠してるとかじゃないんだけど・・・・・・・・」

渚って意外と勘がいいんだよね・・・・・・・・さすがに、そこを突かれると痛い。でも、そんなあたしに救世主は現れた。

「なぎ兄ちゃん！みう姉ちゃんが困ってるでしょ！？早く行こつ、ね？」

「・・・・・・・・うん。そうだね。じゃあね、美羽！今日はいろいろとごめん。あと・・・・・・・・ありがとう！！」

「みう姉ちゃん！！またねっ！！」

「あ、うん。二人ともバイバイ。」

そうして、二人は来た道に戻って行った。とりあえず・・・・・・・・・・
ありがとう、風波ちゃん！！

笑顔

渚たちと出会った日から数日、何事もなくごくありふれた生活を送っていた。でも、最近はよく神龍のことかよく行くし、聖夜ともメールや電話のやり取りをしている。・・・まあ、自分からするのちよつと勇気がいるというか・・・恥ずかしいから、いつも聖夜のほうからしてくれるんだけど。

ま、まあそれはさておき、今日は久しぶりに樹と放課後ショッピングに行くことになった。今日はあたしも部活とかないしな。樹も最近何かと忙しかったらしいから、ここ数日ほとんど遊べてなかったんだ。

「美羽っ！お待たせ！今日はあいつもいないことだし、思いっきり遊ぶわよー！」

「うっ、うん。分かったから、手引っ張らないでよ。」

「ごめんごめん。」

全く・・・樹もよくこんなにテンションあげられるよな・・・ま、なんだかんだ言っただけでも樹のいいところだし、あたしも樹のそういうところは好きだけど。あ、因みに海斗は今日は部活の後家の手伝いがあるらしいから、今日はいないんだ。

「ほらっ！早く行くわよー！」

「おーっ」

あたしは基本いつもテンション低い・・・っていうかこれが通常運転だから、ちよどいいのかもしれない。そんなことを思いながら、あたし達は目的地へと向かう。

・・・因みに、あたしはどこに行くのか知りません。

樹が私に任せてって言ってたから・・・でも、まだ教えてもらってないんだよね・・・ほんと、どこに行くつもりなんだろう？

ざわざわ、がやがや。そこは人で溢れかえっていた。

「すごいね・・・ここ、中に入ったのは初めてだよ。」

「だと思った。美羽ってこういうところあんまり来なさそうだしね。」

「う・・・うん、まあ・・・。」

ま、ここは一種のデパートみたいなところかな？結構いろんなものがそろって噂の。樹はここに来たかったらしい。ここは計5階あって、一階が食べ物系の店・二階が洋服和服やアクセサリー等の店・三階が雑貨や家具等の店・四階がその他もろもろ・五階がアニメとか漫画に本やゲームセンター等・・・とにかくたくさんものがあるみたい。

「まずは、どこに行くの？」

「そりゃあ、ゲーセンから！買うのは最後にしないと重いしね！！」

ゲーセンか・・・あ、うちの学校は基本自由だから、何を持ってきてもいいんだ。まあ、その分ちゃんと自分で管理しないと駄目だけどな。と、いうことで、あたしと樹はゲームセンターのある五階へと進んでいった。

「きゃー！見てみて！！一発で取れちゃった！！」

「すごいね樹・・・」

なにがって・・・まず第一にテンションが。このゲームセンター特有のうるささにも負けないくらい、さっきの樹の声は大きかった。あと樹は慣れているのかもともと才能があつたのかはわからないけど、クレーンゲームが得意なようだ。さっきから何個もとっている。

・・・これじゃあ、結局荷物になるんじゃないかと、思ったことは言わないでおこう。

あれから約2時間経過。

「ああ〜楽しかった！また来ようね、美羽！！」

「うん。そうだね。」

あたしたちは、ゲーセンでいろんなものを何個かゲットした後、雑貨屋を見たり服を買ったり・・・とにかく時間を忘れて楽しんだ。樹なんか今日はいつもに比べてテンションが高くて、しかもそれは始終つづいたのだ。そんな樹といるのはもちろん楽しいが・・・やはり、最後にはドツと疲れが押し寄せてきた。それにしても・・・。

「樹・・・そんなに荷物持ってて大丈夫なの？重くない？」

そう。片手で軽々もてるくらいの量しか買ってないあたしに比べて樹はというと・・・両手で持つのもいっぱいぱいなくらい持っているのだ。それでも疲れを感じさせない樹はすごいと思う。いや本当に。

「ああ、それについては心配しないで。後で迎えに来てもらうから。」

ああ・・・そうだった。樹もなんやかんやで結構なお金持ちだったんだ。まあ・・・そういうなら大丈夫か。樹は意外としっかりしてるから・・・。

「じゃ、迎え来るまで話し相手になってようか？」

「うん。明日あいつになんか言われるのも嫌だし、もう結構遅いから・・・美羽はもう帰って!!」

「そう?・・・じゃあ、また明日ね。」

「うん。バイバイ!!」

そういつてあたしたちは別れた。あたしは、いつものようにマイペースに歩いていく。そして、だんだんと人氣がなくなってきた頃、よく見知った背中と、知らない男の人がいた。

「言っただよっ!もう二度とうちには来ないでっ!!」

あれ・・・なげさ・・・?

「……渚。何度も言うが、あの時のことは本当に悪かったと
思っている。だから……」

「やめてよっ！そんなこと言っただってどうせっ……！」

「……なんか、ここにいちやいけないような……あんな渚始めて
見るな……とても憎しみのこもった眼……」

あの男の人はだれなんだろう？

色素の薄い茶髪に茶色の瞳……とても若く見えるけど、彼のま
う雰囲気はとても大人っぽく見える……。

そして、しばらくこの成り行きを見守っていると、突然彼の携帯
が鳴りだした。彼は、携帯を取り出し開いて………なんだか眉
を顰めた。

「………渚。」

名前を呼ばれ、渚の方がビクツと揺れたのがここからでもわかった。
なんか………怯えてるっぽい………？

あたしは、今すぐにでも渚のもとへ駆け出したい衝動に駆られた。
そして、あの男を殴りたい……何があつたのかは知らないけど、
渚はなんでもない相手にあんな顔はしないし、怒鳴りつけたりしな
いやつだ。それは、少しでも渚と話したことがある人ならだれでも
そう思うと思う。それにあたしは家柄、人の本質とかを見抜くのは
慣れているし、自分でも結構当たる方だと思っている。

「すまない。………また来る。」

「……そんなことが許されると思ってる？ 風波だつて……。」

「……すまない。お前に許してくれとは言わない。ただ……。」

「………っ！もう、二度と僕たちの前に現れないでよっ……！」

「………。」

そして、何も言わずに男の人は去って行った。

渚・・・泣いてる・・・？

あたしは、今度こそ渚へと駆け寄って行った。

「・・・・・・・・・・渚・・・？」

そういったらまたビクツと肩を揺らし、ゆっくりとこちらへ振り返った。

「美・・・羽・・・？どうしてここに・・・？」

「・・・ごめん。家に帰るところだったんだけど・・・偶然、見ちゃって・・・。」

そういったら、渚は無理やり作ったような笑顔をした。

「そっか・・・ごめんね？今見たことは忘れて・・・。」

何言ってるの・・・。

「忘れないよ。・・・渚、そんな無理して笑顔作らなくてもいいんだよ？泣きたいときは思いっきり泣いてもいいんだよ・・・。」

あたしも、そうして聖夜に救われたから・・・問題はまだ解決してないけど、いろいろ吹っ切れて・・・楽になれたんだ。

「渚。あたしが聞いていいことじゃないのかもしれないけど・・・よかったら話してくれない？・・・ううん。あたしじゃなくてもいい。神龍の皆でも。」

今の渚には誰か真摯に話を聞いて、渚の痛みを和らげてくれるような・・・そんな存在が必要だ。渚には、あの時のあたしのように感情を・・・あの笑顔をなくしてほしくない。

「美羽・・・ありがと・・・。」

「ううん・・・あたしは何も。」

そうして、どうにもその場を離れがたく突っ立ったまましていると、渚が「こつち来て」っといったので、ついていくことにした。行きついた場所には、特にこれといった特徴のない公園のベンチ。

「・・・あの、さっきの人ね・・・僕の・・・お父さんなんだ。」

そして、渚は過去のことについてあたしに話してくれた。

少しずつ歩んで行って（前書き）

の範囲は、渚視点です。

多少流血表現あるので気を付けてください><

少しずつ歩んで行って

僕があの人に本当に会わせたくないのは風波。・・・風波はあの
人から・・・・・・・・から。
虐待を受けていたから。

ごめんね・・・守ってあげられなくて。
気づいてあげられなくて・・・。
自分の不甲斐なさに腹が立った

風波や僕は普通の家庭で育った。お父さんは普通の一般会社の社員。
そしてお母さんは専業主婦。風波は今はだいぶ良くなったけど、と
ても病弱でよく熱を出しては寝込んでいた。でも、それでも僕の話
をいつも笑顔で聞いてくれた。

幸せだと思ってたよ。

朝お母さんに起こされて、皆に行つてきますって言うて玄関飛び出
して、学校で友達とたくさんいろんなことを話して・・・風波にそ
の日何があつたか話したりして。風波はその話をずっと、最後まで
聞いてくれて笑っていてくれた。

・・・・でもある日、その笑顔は偽りだと分かったんだ。僕やお

母さんに心配かけたくなくて、無理して毎日笑ってたんだって・・・。

それを知った時、初めて知った感情。

怒り、憎しみ、悲しみ、後悔、恐怖・・・・・・・・。。。

こんなたくさん負の感情が同時に湧き上がることがあるなんて、初めて知った・・・。

・・・それは、ある休みの日僕が友達の家からいつもより少し早めに帰ってきたときのこと・・・。

暑い暑い夏の日。僕は、家の帰りの途中にコンビニによって、風波へアイスとかって買ってあげることにした。

「風波喜ぶかな」

僕は、ご機嫌でアイスが溶けてしまわないよう急ぎ足で家へと向かっていった。今日は風波に何話してあげよう。いつもそう言う僕は、いわゆる世間でいうシスコン。それは自分でも認めているし、いいことだとも思う。周りからは多少あきれられてるけどね。風波は幼いころから病弱で、そのせいで学校も休む日が結構あってクラスにもあまり馴染めなかった。

それでも風波は強い子だから、弱音なんてほとんど吐かなかった。だから、せめて僕がそばにいる間は風波に嫌な思いはさせたくないと思って、いろんな楽しい話を聞かせたり、風波の願いは喜んで

聞いてあげていた。

そして、今日もいつもと同じ感じで過ぎていくつもりだったのに・。
・。勢いよく玄関を開けようとすると、中から風波の叫ぶような声が聞こえてきた。何があつたんだろうと思って、僕はそつと玄関を開けて家に入り、声の発信源の部屋のほうへ恐る恐る近づいて行った。

もしかして泥棒とか・・・？

だとしたらさっきの声は・・・。

「やあっ！！やめっ・・・！！」

しばらくしてまたそんな声が聞こえてきて、僕は慌てて空きっぱなしのドアの方、声の聞こえる方へとかけていった。

でも、その中には予想すらしていなかった光景が広がっていた。

な、んで・・・どうして・・・？

授業で習った。そこには僕の家には無縁だと思っていたもの。僕の頭の中に『ぎゃくたい』という文字が浮かんだ。

泥棒なんかじゃない。泥棒なんかより、ずっと、ずっとたちが悪い。

・・・お父さんから暴力を受けている風波の姿がそこにあった・

・・。

ドサッ・・・・・・・・。

その音を聞き、風波とお父さんはこっちを向いた。でも、僕はそんなの見ていなかった。

「どうして・・・・・・・・。」

どうして？

ずっと、ずっと幸せだと思ってたのに・・・・。僕も、風波も、お父さんもお母さんも・・・・。そう思っていたのは僕だけだったの？

“ なんて風波なの ”

気づいたら僕は衝動的に風波のそばに駆け寄って、お父さんを睨みつけていた。それはお父さんへの憎しみなのか、今まで気づいてやれなかった僕自身への怒りなのか・・・・たぶん、その両方だろう。

「 なぎ、兄・・・・ちゃん。 」

今にも消えてしまいそうな風波の低い声が、静かになった部屋に響いた。

「 風波・・・・部屋に戻ってて？ 」

僕は、なるべく風波を怖がらせないように優しく声をかけた。僕を

見る風波の目はうつろで・・・今にも壊れてしまいそうだったから。声は・・・震えていたと思う。僕だってまだまだ子供だ。恐怖だつてももちろんあった。そんな僕に気づいたのか、風波はふるふると首を横に振って、僕の服の裾をギュツと握りしめた。そんな風波の仕草に、勇気をもらったのは言うまでもない。僕はもう一度ゆっくりとお父さんのほうを見据えた。

「お父さん・・・・・・・・。」

「なんで・・・風波に何してたのっ!!」

お父さんの方も落ち着いていたのか、僕のほうを冷たい目で見る。

怖い・・・。

ああ、風波はいつもお父さんのこの視線のもとにさらされていたのか・・・。

「渚。お前には関係のないことだ。」

「何が関係無いの!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ。」

風波を傷つけていたことはどうでもいいのか、心底面倒くさいといった顔でお父さんはため息を吐いた。

「風波が何したっていうのっ!？」

「別に。何もしてないよ。」

「じゃあ、なんでっ・・・・・・・・!!」

泣きそうになった。お父さんが何を言いたいのかがわからなくて、通じ合えないのが悲しくて。僕が叫ぶように言うと、お父さんもつ

いに僕に怒鳴りつけた。

「うるさいんだよっ！だいたい、金の余裕もないのに平気な顔して病院に通いやがって！！それなのに、皆こいつには何にも言わずになんでもないように接して！！俺が苦勞して稼いでんのに！！」

言うと同時にお父さんは足を振り上げた。とつさに僕は風波をかばう。

「・・・・・・・・・・いつ！」

「なぎ兄ちゃんっ！！」

風波の悲鳴にも似た声が僕の耳に届いた。
悔しい・・・・。

どうして僕はこんなにも無力なのか。でも、少なくとも僕は知ってる。風波は『平気な顔して』なんていない。いつだって陰で苦しんでた。きつと心のどこかで泣いていた。

お父さんは、そんな風波の姿を見ようとしていないだけだ。風波のことを理解しようとしてもしないで、自分勝手な都合でこんなにも風波を傷つけて。

それでも悪いのは風波だという。その姿に吐き気がした。

「うあああああつ！！」

「・・・・・・・・・・っ！！」

気が付いたら僕はお父さんに殴りかかっていた。

「」のっ！！」

「・・・・・・・・・・う！けほっ！！」

何度やられたって立ち向かっていった。背後で、風波の泣き叫ぶような声が聞こえてくる。

こんなに、こんなに風波は苦しんでるのにつ！！

そう思うと、いてもたってもいられなくなっただ。そうしていると、僕はお父さんに突き飛ばされて、机にぶつかった。

「なぎ兄ちゃんっ！！」

風波が突然駆け出してくる。なんだと思うと頭上で今にも落ちてきそうな壺が目に映った。机の上に飾ってあった壺だ。そんなことを僕は呆然とただ思っていた。その時は考える気力すらなかった。・
・ただその壺が落ちて来る前に、誰かに精一杯の力で押し退けられたことだけはわかった。

・・・・でも、気づくのは遅すぎたんだ。

「・・・っ・・・？な、なみ・・・？」

気づいたら、僕がいたその場所には・・・頭や腕・・・いたるところから血を流した風波の姿があった。

「ななみ・・・風波っ！？」

手のひらから伝わるぬるぬるとした血の感触。

僕はパニックに陥った。

「・・・それからは、偶然お母さんが買い物から帰って来てくれて、救急車呼んで風波も助かったよ。お父さんとお母さんも離婚した。でも・・・風波は、しばらくの間大人の男の人が駄目になっただ・・・。」

それは、普段の渚からは想像もつかないくらい辛い過去だった。もしかしたら渚は、そのころからずっと罪悪感に苛まれていたのかもしれない。

「だから僕は・・・その時から、風波を守ろうって思ったんだ。・・・もう絶対に、辛い思いとかしてほしくないから・・・。」

偉いね。渚は・・・あたしは自分のことで精いっぱいだったのに。ちゃんと、いろんなことに向き合って、立ち向かって。

・・・前に進もうとしている。

「・・・渚。」

・・・泣いてる・・・。

「僕っ、僕は・・・風波を守るところか・・・助けられちゃってっ、風波の方が傷ついちゃって・・・！」

「渚。もついいよ。・・・話してくれてありがとう。」

渚は誰にも自分の思いを伝えられなかったんだよね。・・・とって

も人思いで、優しいから……。でもこのままじゃいけないんだ、きつと。

変わらなきゃ。

「渚……さっきあの人と何話してたの？」

「……。もう一度やり直したいって……。」

だからか……。そりゃあ過去にあんなことがあつたら渚だって取り乱すな……。

「それを知ってるのは渚だけ？」

「うん……。風波には絶対に言いたくないから……。」

「そっか。じゃあ、お母さんは？」

「……。なんか、言いづらくて……。」

渚はそういうと、悲しそうに顔を俯かせた。でも多分この問題を解決できるのは、渚のお母さんと……。お父さんだけだ。

「渚……。せめて、お母さんには話しておいた方がいいと思うよ……。でないと、きつと何も始まらないし、終わらない。」

このままじゃ渚にとっても風波ちゃんにとってもよくないと思う。物事をあやふやなままにしておいてはいけない。

「……。うん。そう、だよね……。お母さんに話してみる。」

「うん。．．．．そんな不安そうな顔しなくても大丈夫だよ、きつと。お母さんって、案外強いものだから。」

あたしにはよくわからない領域だけど．．．少なくとも『夜月』ではそうだ。夜月のお母さん．．．．というか姐さん？なんだけど、あの人はいろんな意味で強い．．．．というか怖い。いろんな意味で。極道の世界では、女だってある程度強くあらなければならない．．．．らしい。これは、お母さんが言ってた。

それは何を指していたのかあたしはわからなかった。だから、あたしはあたしのやり方で強くなるうって思っで、いろんな人に武術やその他もろもろ片っ端から教わってた。．．．．そうしたら心も強くなるかなって．．．．．実際は、そんなこと全然ないのに．．．．．。

そんなあたしには、渚はとても強い子だと思う。
誰かのために強くなるうとすることのできる強い心を持つてると思う。

そんな渚のお母さんなんだから、強いに決まってる。

．．．．これは渚の家の問題だからでしゃばったこととか言えないし、あたしにできることなんて何にもないけど。もし渚がまた不安に思うことがあるのなら．．．．。

あたしは、何回だって言うよ。

．．．．．『大丈夫』だって。

それから数日後、あたしは神龍の皆のところに行った。聖夜はいろいろ忙しいらしく訪ねてもいないことが結構あるけど、今日はいたようだ。

「お、来た。美羽〜!!」

「皆久しぶり。・・・そろってどうしたの？」

倉庫に入ると、皆それぞれが挨拶してくれた。うん。やっぱり根はい人たちばかりだな。

「美羽。こつち。」

「あ、うん。・・・ありがとう。」

幹部しか入ってはいけないという部屋に入ったら、ソファーに座っている聖夜が隣をポンポンと叩いてあたしを促した。ちょっと聖夜あたしに遠慮なくなってきたな・・・ま、あたし的にはその方がいいんだけど。

・・・っていうか、前からそうだった？

「・・・ねえ、美羽。」

「なに？」

「前に、渚と公園にいたよね？」

「え？うん、いたけど・・・。」

そう肯定すると、聖夜の笑みが深まった。なんだろ・・・部屋の温度が5度くらい下がったようなこの感じ・・・。

「何話してたの？」

「え．．．そ、それは．．．。」

「聖夜たちには秘密だよっ！！」

「え？うわっ、渚！？」

あたしがどう答えようか迷っていると、突然渚に後ろから抱き着かれた。まあソファ―が間にあるから、そこまで密着してはいないんだけど．．．。

「．．．．．渚。離れる。」

え．．．．．せ、聖夜．．．。

なんか口調が変わったんだけど．．．．。

「はい．．．美羽、後でまた話そうね！」

話したいことがあるから、と言って渚は瑛太たちのところへ行った。

「．．．．．ねえ、美羽。」

「はっ、はい．．．？」

「．．．．．。」

こ、怖い怖い怖い．．．．．。さっきから聖夜が笑顔であたしを見る．．．。でも目．．．目が、さ．．．笑ってないんだよ．．．．．。

「目、閉じて．．．。」

「え．．．？っ、うん．．．？」

あたしは素直に目を閉じた．．．。それと同時に聖夜の気配が近づ

いてきた。

・・・・・・・・・・が、

「聖夜あ！人前で何しようとしてんだよ！！」

ドカツという音が聞こえてきて、驚きについ目を開けてしまった。

そこには頭を抱えている聖夜のドアップの顔と・・・・・・・・葉月の姿。

「・・・・・・・・・・いつてえな・・・。」

そんな呟きとともに、またこの部屋の温度が10度くらい下がったような錯覚がした。

ひいひい！！

ちよつと居た堪れなくなつたのと、ここから離れたいという思いから、あたしはこつそりこの今や氷点下くらいの寒さになったここから出ようと、立ち上がるうとした。

「どこいくの。」

・・・が、それが叶うことはなかった。

「いや、ちよつと外に・・・。」

「駄目。美羽はすぐどこかに行っちゃうんだから。しかも方向音痴だし。」

「・・・・・・・・・・。」

どうやらあたしは聖夜の中で、かなりの方向音痴だと思われるらしい。いや、確かに人に聞きながらじゃなきゃここにたどり着けないんだけれども・・・。
なんか複雑だ・・・。

「あつ、僕もう帰らなきゃ！」

あれから何時間経って、現在PM3時。渚はこれから用事があるらしい。

「美羽・・・ちよつといい？」

「あ、うん。」

あの事なんだろうな・・・。渚はお母さんにちゃんと云えたのだろうか・・・。まあ、どっちにしろ渚にとって最善の状況になっていればいいと思う。

「あのね・・・あの事なんだけど・・・。」

今いた部屋よりもっと奥の方へ行つた。ここらへんは人が通らないところらしい。

「僕、ちゃんとお母さんに言えたよ。・・・そのあと、お父さんと話したって・・・。。。。。。お父さんはもう来ないらしいよ。ただ・・・・・・・・。。。」

嬉しそうな、でも悲しそうな顔で話す渚。

「僕ね、ちよつと誤解してたかも。何の理由もなしに風波を傷つけてたんだと思ってた。でも違つたんだ。・・・あの時は、会社があんまりうまくいってなかったんだって・・・・・・・・。」

それでも、やったこと自体は許せないけどね。と、渚は言った。

「それでね、僕分かったんだ。一人で抱えてても何にもならないって。・・・だからこれからは一人でどうしようもないことだったら、もっと皆に相談しようと思う！」

そういつて笑った。多分これは本当の笑顔だ。

「美羽、ありがとう。美羽のおかげで僕、前に進むことができたよ！！」

「ううん。それは渚自身が頑張ったからだよ。あたしは何もしてないし・・・。」

「そんなことないよ。・・・ほんと、ありがとう。」

「・・・うん。」

「あっ時間だ、じゃあまたねっ！！」

渚はもう大丈夫だな・・・。ちゃんと自分の足で進めてる。これから、あのままの渚でいてほしいな・・・。

そう思いながらあたしも、さっきいた部屋に戻っていく。

再会

それはそれは憎しみのこもった目がまっすぐにあたしを貫いていく。

あの時と何にも変わらない瞳。

悪夢はまだ終わってなんかいない

「美羽。おいしい？」

「う、うん。おいしい・・・。」

ここは街の中にあるおしゃれな喫茶店。とても落ち着いた雰囲気の内装をしている。あたしはそんなところにいた。

・・・聖夜と。

えーと、何故こんなところにいるかというと・・・。

あの日・・・あたしが神龍のあの倉庫に行って、渚と別れた後のこと。

まあ・・・・・・・・迷子になりました。

いや、だっていつもはあんな奥に行ったりしないし、結構道だって複雑だったから・・・・・・・・。

ま、まあそれは置いて。

あたしは何とか（１５分くらいで）自力でたどり着いたんだけど、部屋に入ったら皆ものすごい剣幕でこっちに来て・・・・・・・・い、いや・・・・まあ、あたしは皆に心配されて探されていたらしい・・・・。そのあと、皆はあたしが部屋を出ていこうとする度について来ようとして大変だったんだけど、問題はそこじゃない。

そう、聖夜・・・・・・・・。

めちゃくちゃ笑顔で怒ってた。

そこはだれも使ってないらしい、生活感のない部屋でのこと。因みにここにいるのはあたしと聖夜だけで、ほかの皆は何故かついてきてくれなかった。

『美羽。どこ行ってたの。渚は？』

『い、いや、渚はもう帰ったと思うよ・・・・。』

『そう。それで美羽は何してたの。』

なんかあたしがしゃべる度に聖夜の怒りのパラメーターが上がっていくような気がする・・・・。しかももう疑問が疑問形にすらならないし・・・・・・・・。

『えっと・・・・・・・・その・・・迷子に・・・・・・・・』

『・・・・・・・・ままだいたい予想はできてたけど。』

『ゴメンナサイ・・・・。』

『俺、言ったよね。美羽はすぐに迷子になるって。・・・それは美羽も予想できたことだろうに。だいたい渚に送ってもらおうとか考えなかったの。まったく・・・・・・・・・・・・・・・・。』

と、そんな感じで聖夜の嫌味・・・説教(?)が続いた。

『うう・・・・・・・・』

なんかだんだん自分が情けなくなってきた、自然になんだかわからない涙が出てきそうになったとき。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

やっと聖夜は説教という名の嫌味攻撃をやめてくれた。

『・・・・・・・・じゃあ、お詫びに今度俺とデートして。』

『うん・・・・って、え!?!で、デート!?!』

あたしは今度は真っ赤になって、聖夜を凝視してしまった。

『うん、そう。あ、因みに拒否権はないから。・・・・・・・・あとその顔可愛い。反則。』

『ええ!?!ちよっ・・・・・・・・!?!』

なんかよくわかんないまま抱きしめられた。そしてそのまま耳元で囁かれる。

『…………約束だよ、美羽。』
『…………っ…………うん…………。』

そう返事した後、聖夜にき、キスされた。

『さっきできなかったから。恋人なんだからいいよね？』
『…………うん。』

…………そのあと、あたしが羞恥で顔をあげられなくなったのは言うまでもない。まあ何にしろ、聖夜の機嫌が直ってよかった…………のかな。

まあ、つてな感じでここにいます。その時はいろいろ大変だったけど、聖夜と出かけられたこと自体は嬉しいので結果オーライってことで。

「ねえ、美羽。最近渚今まで以上に元気なんだけど、それって美羽のおかげ？」

「ああ…………全く関わってないって言ったら嘘になるけど…………。」

変わったのは渚が頑張ったからだから…………でも、全く関わってないっていうのは無責任だよ…………。

「そう…………ありがとう。」

「え？」

「いや…………神龍の奴らは、なんだかんだで皆いろいろなもの抱えてるから…………。」

あ．．．そういえば、渚もそんなこと言ってたっけ．．．．

．．．．．聖夜は．．．。

「．．．聖夜も？．．．．．聖夜も抱えてるの．．．辛いことか．．．。」

だったら。

だったら、救いたいと思う。聖夜のことを。

他の誰よりも。

あたしはまっすぐ聖夜を見つめた。

「そうだね．．．ない、とも言えないけど。」

「けど？」

「．．．．．美羽や皆程じゃないよ。」

「．．．．．。」

そうだ．．．聖夜は、一部とはいえあたしの過去を知ってるんだ。
でも、あたしは．．．。

「あたしはもう辛くないよ。あの時も、今も．．．そばに聖夜がいてくれるから。」

だから、今はむしろ幸せ。そういつてほほ笑むと、聖夜も笑顔になつてくれた。そのあと、あたしと聖夜はいろいろな店を行って楽し

んだ。今まで・・・聖夜に会いたいつて思ってた時を想うと、今の光景が信じられない。信じられないくらいに・・・幸せ。

「聖夜、今日は楽しかった。ありがとう。」

「ううん。こっちこそ。じゃあ、また今度。」

「うん・・・。」

いざ離れてみるとなると、なんとなく寂しくなってくるこの感情すら今は愛おしく思える。こういう時は、また会えなくなってしまうのではないかと少し不安になるけど、また当たり前に会えた時のあの嬉しさは尋常じゃないんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

帰り道。携帯のメール、電話着信合わせて15件。しかもほぼ海斗。・・・全然気づかなかった。・・・マナーモードにしてたから・・・。とりあえず、一つ一つ見てみる。まあだいたい内容はおんなじだけど。

例えば・・・

《美羽！？全然返信こねえけどどうしたんだ！？》

とか、

《美羽うゝ！！返信してくれえー！！どっか出かけてんなら早く帰ってこいよおおー！！！！》

・・・・・・・・・・とか。

あ、ちなみにこれらは留守電。読むだけで若干疲れたあたしは、ため息を吐いてメールで、もうすぐ帰るとだけ返信した。そんな時、こげ茶っぽい髪と瞳の青年があたしの前で立ち止まった。

・・・なんだろう。どこかで見たことがあるような顔・・・・・・・・。そう思い青年を見ていると、その青年はあたしに向かって言葉を投げつけた。

「・・・・・・・・ずいぶんと元気そうだな・・・・。」

「・・・・・・・・え？」

一瞬何を言われたのか分からなかった。けど、その言葉であたしとこの彼は初対面ではないことがわかる。どうしたらいいのかわからなくて、少しだけ動揺していると、鋭い視線をよこされた。

「・・・忘れたのか？俺のこと。・・・・・・・・ま、どうでもいいけど。」

「・・・・・・・・名前は？」

あたしはそれだけ聞くことにした。そういうと、青年は少しだけ目を見開き直後にさっきよりも憎しみのこもった目であたしを見た。

「・・・・・・・・そのうち、分かる。」

それだけ言つて、青年は去つて行つた。何なんだ、一体。あたしはあーゆう視線にはもう慣れたから、怖くもないし何ともないんだけど、何かが引つかかる。．．．でも、どうしてもあの青年が何者かがい思い出せない。もやもやした気持ちを抱えたまま、あたしは今やもう見慣れた我が家へと歩き出した。

「．．．．許さない．．．．。」

よみがえる記憶。

こげ茶色の髪と、黒っぽい茶色の瞳．．．。

そ、ら

「空．．．。」

「お前が．．．お前が代わりに死ねばよかった。」

．．．．．うん。

「母さんの代わりに」

知ってる。

「お前が」

あたしが……。

「母さんを」

殺した

「・・・・・・・・ッ!はっ・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・。」

これは・・・・・・・・今は・・・・・・・・。

「・・・・・・・・ゆ・・・・・・・・め・・・・・・・・?」

ふと窓の外をしてみる。カーテンの隙間から漏れる光がこの部屋を照らしている。・・・・・・・・朝、だ・・・・・・・・。

コンコンッ

「美羽ー?起きてるか?入るぞ。」

海斗だ。

「・・・・・・・・ちょっと待って。」

あたしは急いで近くにあったタオルで汗を拭く。・・・・・・・・汗のせいで服が肌に張り付いていて気持ち悪い。・・・・・・・・もう、悪夢にうなされることなんてなくなってたのに・・・・・・・・。

「うわっ!美羽!?汗だくじゃねえか!」

海斗・・・・・・・・いつの間に・・・・・・・・。

「・・・・・・・・待つてって言ったはずだけど?」

「気にすんなよ。いつものことじゃねえか!」

そういつてにこつと笑う海斗。自覚してんのかよ……。……
でも、ちよつと気が軽くなったかも。

「で、どうしたんだよその汗。……顔も真つ青だしよ……。」

海斗が心配そうな顔であたしを見る。

……。なんか悪いな……。

どこまでも心配性な海斗にとにかく安心してもらおうと、あたしはなるべく笑顔で言葉を発する。

「いや、別に……。ちよつと嫌な夢見ただけだから。」

ほんと……。夢なら起きた瞬間に忘れていてもいいものなのに。夢での出来事があり得ないくらい鮮明にあたしの記憶に刻まれている。多分、あの青年にあつたからだ。夢にも出てきたあの青年は多分……。空だと思う。あの時……。空に会ったときなんで気が付かなかったのか不思議なくらいに、あたしの心の奥底でそう確信している。そう思ううちに、また夢のことを思い出してしまいそうになったとき、海斗の手があたしの頭に軽く乗せられた。

「そうか……。大丈夫か？なんなら、今日は学校休んでもいいんだぞ？」

「大丈夫。……だいたい、悪夢見たくらいで学校休むとかありえないから。」

そんなことを言いながら、あたしの頭の片隅では、今日学校だったっけなんて思ってた……。やばい。重症かもしれない。頭が正常に働いてくれない……。とにかく、まずは頭を落ち着かせなきゃな……。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!!」

・・・あの悪夢の日から一週間、毎日似たような夢を見るようになったあかし。起きた後は決まって服は汗で濡れていて、おまけに激しい動悸と息切れ。今日は一段と酷かった。

「・・・・・・・・・・気持ち悪い・・・・・・・・。」

吐き気がする。

やけにはつきりした悪夢。

忘れるな、と言っていた。
忘れることは罪。

・・・絶対に許されない・・・・・・・・と。

空ではなく・・・・・・・・。。

小さいころのあたしがあたしを何の感情もない目で、淡々と。何度も、何度も・・・・・・・・。

「・・・・・・・・はっ・・・・・・・・っ・・・・・・・・。」

泣かない。あの時、聖夜に会った時からそう決めていたのに、気を緩めたら涙が出てきそうで怖い。心を強く持たなきゃ。多分これは、

あたしの心の弱さが生んでいるものだから……。幸い、一週間前のあの日から三日も経てばもう慣れた。最近ではすぐに持ち直すことができるようになった。

大丈夫。

まだ、だいじょうぶ……。

「おはよー美羽！……今日は大丈夫？」

「おはよ。うん、大丈夫だよ。」

「……そう……。」

学校に行く途中で、樹に会った。樹は妙なところで鋭いから、あたしの体調の変化にもすぐに気づいた。

「……本当に？……昨日より顔色悪くない？」

「そう……かな？……確かに今日のはちよつと酷かったけど……。」

「……美羽。」

「な、なに……？」

「前にも言っただけど、私たちは親友なんだから！遠慮なんかしないで、調子悪くなったらすぐに私に報告して！！いい？」

「……うん。ありがとう。」

あたしは笑顔でお礼を言った。樹はあたしが遠慮しようとする度にこう言ってくれる。その言葉にあたしは自然に笑顔になってしまう。

『親友』

……なんていい響きなんだろう。まだ施設にいたころまでのあた

しには、親友なんて必要ないと思ってた。でも樹に会って、親友とか友達の大切さが身に沁みて分かったんだ。

その言葉があたしを救ってくれる。聖夜にあってから分かった。あたしの周りにはこんなにもあたしを支えてくれる人たちがいること。皆みんな、何気ない言葉や行動であたしを救ってくれる。

幸せだ、と思える。

そんなあたしに気づいたのだろう、樹は違う話に切り替えた。あたしも夢のことはいったん忘れて、樹との話に集中する。そうしてあたしたちは学校へと歩いて行った。

ワイワイ、ガヤガヤ……

教室に廊下……何故かはわからないけど、生徒でにぎわっている。正直うるさい。

「なんか今日は騒がしいね……」

「うん。転校生来るらしいよ？」

「そうなんだ……」

なんで知っているんだ……？まあ樹が結構情報通なのは知ってるけど。それにしてもまた時期はずれな転校だな。でも、この方が夢のことか思い出さなそうでいいかも……

「うんうん。そんでねーその転校生は男の人らしいんだけど……」

「ふうん……」

「……美羽。ちゃんと聞いてた！？」

「き、聞いている。聞いているって。」

適度に適当に聞き流していたら睨まれた。正直言って怖いですが、樹

さん…………。

「皆席につけよー。」

そしてしばらく経ってから、そう言いながら先生が教室に入ってきた。

「ああ…来ちゃった。」

そついいながら樹も席へと戻って行った。

「転校生紹介するぞー。」

先生がそついうと、クラス中から歓声が上がった。というかこのクラスだったんだな、転校生……。

「おい。入ってこーい。」

先生がやる気のない声で呼びかけてから少しして教室のドアが開いた。そして見えたのは見覚えのあるこげ茶の髪。教室中がさっきの喧騒を取り戻していた。

「初めまして。佐伯空さへきそらです。これからよろしく願いします。」

ああ…………。やつぱり…………。こんなこと思っちゃいけないんだろうけど…………参るな…………。

空が顔を上げるとき、目があった。今はクラスみんなの前だから

抑えているけど、やっぱり憎しみのこもった目。

・・・あの時と何も変わらない・・・・・・・・。
空の時間はあの日から止まったままなのか・・・？

そう思うとなんだかすごく、悲しくなった。

「えー佐伯の席はあそこな。」

「はい・・・・・・・・。」

そういつて先生が指した席を見て少しだけ安心する。・・・・・・・・近
くでなくてよかった。

「ん。今回はこれで終わり。何も無いしな。チャイムなるまで静か
にしろよー。」

そっいつて先生は用があるのか教室から出て行った。

・・・・・・・・あの夢は警告だったのかな。
死ぬまで許さない、って言いたいのか・・・・・・・・。
何にしろこれからはいろいろと用心した方がいいかもな・・・・・・・・。

噂の転校生

そして放課後。

「美羽！帰ろう！！」

「あ、うん。」

「俺も一緒に帰るからな！！」

「分かった分かった。」

今日は皆部活がないので、あたしは樹と海斗と一緒に帰ることにした。心配していたことは何もなく、比較的平和な1日を過ごせた。空からたまに感じる視線は相変わらず鋭くて居心地の悪いものだったけど……。結局話すことすらなかった。……。まあ、学校の生徒たちに質問攻めにされていたからってのもあるのかもしれないけれど。

因みに、あたしと空が双子の兄弟だということは誰も気づかなかったらしい。

……。そのことに、心のどこかで安心した自分がいた。

海斗も空のことは知らないだろうから、多分大丈夫だろう。……。でも、これからも気は抜けない……。と、思う。

空は絶対にあたしに何かしらしてくるはずだ。でなきゃ、わざわざあたしのいるこの学校には来ないだろう。……。教室に入った時も驚いた顔はしなかったし。

別にあたしに何か危害を加えてくるのは構わない。

・・・当然の報いだと思うから・・・。

でも・・・。

でも、あたしのせいであたしの周りの人たちが傷つくのだけは、絶対に許せないと思う。

たとえそれが空でも。

もしもそんなことが起きたなら、あたしだって容赦しない。

絶対に、誰にも危害を加えられないようにする。

・・・あたしが、守る。

そんなことを胸の内に思いながら、家へと向かった。

・・・

「美羽ー！朝だぞー！！」

「ん・・・うん。分かってる・・・。」

深い、深い夢から覚める。あれから・・・空が転校してきた日から5日が経った。不思議と、毎日のように見ていた悪夢は見なくなっていた。・・・今では、それが逆に何かが起こる前兆のようであまり怖くなるけれど。そんなことではこれからやっていけない。いつものように頭の中を切り替える。

今日は休日だけど、あたしも海斗も部活で学校へ行かなければならない。といつてもその部活の時間まではまだまだ余裕があるので、あたしはゆっくり朝の支度をした。

正直学校に行くのは憂鬱だ。だが休むたびに、なぜかその次の日皆に異様に心配されるんだ。その方がなんだか嫌だし悪いこととした気分になってしまうので、極力休むのは控えている。ベッドと整え服に着替えて、適当に身なりを整えた後廊下に出る。

「おはよう、美羽！今日はよく眠れたか？」

「・・・うん、まあ。」

廊下に出た途端海斗の満面の笑顔が見えるのはまあいつものことなので気にしない。

「今日は美羽も部活だろ？俺もだから学校一緒に行こうな。」

「うん。そうだね。」

因みに部活の始まる時間は一緒らしい。あたしたちは朝食を食べてから部活に行く用意をしていると、ちょうどいい時間ぐらいになったので、一緒に学校へと歩いていくことにした。

そして、部活終了後。

海斗のほうは少し時間が長引いているようなので、教室で待つことにした。自販機で買った飲み物を飲んで休んでいる。教室にはだれもないが、如何せん今日は多くの部活動が活動しているためか、廊下は意外と騒がしかった。

そんな中、廊下を通る女子生徒二人組の声が話題が話題なだけに、

自然と耳に入ってきた。

「ね、聞いた？転校生の子の噂！」

「ええ！？何それ、どんなの？」

「んつとね、転校生・・・佐伯君って言うんだけど、彼のお父さん
和泉グループの社長さんの秘書なんだって。それで、佐伯君もたま
にそのお父さんの仕事の手伝いとかしてるらしいよ？すっごいよね
！。まだ高校生なのに！！」

・・・。。。

・・・和泉グループ・・・。

あの、大手企業の・・・？内心、とても驚いた。和泉グループって
のは、知らない人はいないほどの大きな会社だから。・・・それに
昔は普通の会社の社員だったから。・・・あの時の出来事が、お父
さん・・・佐伯若狭と空に大きな影響を与えたのか・・・？

今のあたしにはわからない。

施設に入ってから一度も会ったことも無かったから。

・・・それから何分か経って海斗が戻って来ても、あたしはどこか
上の空だった。

「美羽・・・なんかボーっとしてしっけど、大丈夫か？」

「え？ああ、うん。大丈夫。」

「・・・はあ。」

「何そのため息。」

帰り。どこか上の空なあたしにしびれを切らしたのか、海斗がつい

にそのことについて突っ込んできた。

「美羽はなんかあってもすぐに『大丈夫』の一点張りだからなあ・・・」

「いや、本当に大丈夫なんだって。」

たいしたことじゃねえしな・・・・多分。

「・・・まあ、いや。ちょっと寄って行きてえ所があるんだけど、いいか？」

「うん。」

そうしてあたしたちが向かったところは、商店街。結構家から遠いところにあるから、こんなところあったんだと思った。だが海斗は店には入らず、少し狭い路地に入って行った。あたしも海斗の後についていく。そしてしばらくまっすぐ歩いた先に、広場っぽいところがあった。

「んー・・・お、いたいた！」

「え・・・あれって。」

海斗は向かった場所は、たまり場。・・・・猫の。5匹くらいはいる。野良猫・・・か？

「美羽、猫好きだろ？この間たまたま見つけたんだよなあ。この場所。」

「う、うん・・・。」

そう。実はあたしは猫が好きだったりする。この猫たちは人に慣れているのか、離れていくところか近寄ってくる。やっぱ飼い猫なのか？

・・・いや、それよりも・・・・・・・・。

「可愛い・・・。」

そうつぶやいたあたしに、何故か海斗は得意げな顔をした。

「美羽。俺なんか餌つばいの買ってくるから、ちょっとここにいてくれるか？」

「うん、わかった。いつてらっしゃい」

行ってきます。と言って、海斗はさっきの商店街のほうへと走って行った。その間にあたしは、猫じゃらしが生えている場所があったので、それで猫たちと遊ぶ。楽しそうにじゃれている猫たちを見ると、心が癒される。さっきからあたしの中は可愛いの一言ばかりがでてくる。まあ・・・だって可愛いし。しょうがない。

もしかしたら・・・いや、もしかしくなくても海斗はあたしに気を遣ってくれたんだと思う。家が極道だからなのか・・・ううん。多分もととなんだろうけど、海斗は人の感情の機微には鋭いしな。

そんな時、こつちに向かってくる足音が聞こえた。海斗が戻ってきたのか・・・にしてはなんだか早いような気もするけど・・・・・・・・。

そう思っただけで振り返った。

だけど、そこにいたのは海斗ではなく。

「こんなところで何してるんだ？」

空。

ああ・・・なんかこれはもしかしたら必然なんじゃないかと思ってしまつくらいの遭遇率だな。そう思うのと同時に、今日学校で聞いたあの噂もよみがえってきた。あたしはひそかに、心の中でため息を吐いた。結局逃げられやしないんだ、と・・・。

「ど・・・したの。こんなところで。」

少しの沈黙の後、やっと紡ぎだせた言葉。・・・海斗が来てしまう前に、早くどうにかしてこの場を立ち去ってもらわなきゃ。あたしの頭の中は、瞬時にそのことでいっぱいになった。だって、誰にも知られたくない。

空とあたしの関係・・・・・・・・。海斗にも、今のお父さんお母さんにも、樹にも・・・・・・・・。

聖夜にだって・・・。

すべてを知られるのが怖い。

「・・・・・・・・それはこっちの台詞だ。」

「・・・・・・・・偶々だよ。」

あたしを睨む目は相変わらず。でも、いつになく鋭かった。・・・ここは空の家に近いとか・・・・・・・・？でも・・・ここは所謂商店街の裏側だし。それに空は・・・佐伯家は今は・・・・・・・・。

・・・・・・・・。。

ちゃんと答えてくれるかは分からないけど・・・聞いてみるしかない、か・・・・。あたしは空に、噂のことを聞いてみることにした。

「ねえ、あの噂・・・。」

「学校での噂のことを言っているんなら・・・本当だ。」

あたしが言い切る前に、空は何を聞かれるか察したらしく・・・その答えを言った。本当なんだ・・・。

噂の転校生（後書き）

少し、ほんの少しだけ癒しを入れたくて何故か猫が出てきてしまった（笑）

だが後悔はしないw w

私猫大好きなんです^^

ある休日の日に（前書き）

ここからは、聖夜視点です。

ある休日の日に

そして日曜日。

今日は聖夜と会う約束をしていたので、あたしはなるべく早く待ち合わせ場所につくように家を後にした。因みに海斗は部活があるから、また前みたいに大量にメール等を送らないように置手紙も残しておいた。こっそりと。昨日はあれからお互いに何にもしやべらず、しばらくして空は何も言わずに去って行った。

幸いなことに、海斗にばれることも無く。あたしもまだ聞きたいことはあったものの、それはもう佐伯家にとって他人のあたしが聞いていいことだとは思えなかったから……。

でも、それでもあの噂が本当かどうか分かっただけで、なんだかずいぶんすっきりしたのでそれ以上考えるようなことはしなかった。

「あそこ……かな？」

地図を片手にもち、たまに道行く人に道を尋ねていくと、やっと待ち合わせ場所が見えた。

待ち合わせ時間の10分前。

よしっ！と思つて近づいて行ったら、そこにはすでに聖夜の姿が。

あたしは内心来るの早っ！と思いながら、慌てて駆け寄って行った。

「せ、聖夜！ごめん……待たせちゃったかな……？」

「あ、美羽。おはよう。全然待つてないから、気にしないで。」

「う、うん。」

「さ、行こうか。」

聖夜はそう笑顔で言つて、ごく自然にあたしと手を繋いだ。・・・それは所謂恋人つなぎというもので。実は内心すつごく恥ずかしくて焦っていたりする。

「美羽はどこに行きたいところとかある？」

「ううん、特にないよ。」

「そつか。じゃあ俺の行きたいところとかでいいかな？」

「うん。大丈夫。」

そうして、今日はどこに行くんだろうと楽しみにしながら、聖夜とはぐれないように歩いていく。

「・・・ここ、は・・・？」

「ここはね、俺の父親が経営してる会社の一つだよ」

そう、今あたしと聖夜がいる目の前には・・・所謂“和泉グループ”の子会社。・・・子会社とは到底思えないくらい大きい会社だけど・・・。

・・・というか、え？聖夜の・・・お父さん、が・・・？

「美羽は気づいてなかったみたいだけど・・・俺は、和泉グループのトップの息子なんだよ。」

それを聞いたときあたしはこう思つたんだ・・・。あたしと聖夜は、

住む世界が違いすぎるのではないかと。義理といえども極道の娘のあたしが聖夜の傍に居るのは、聖夜にとってとても都合の悪いことなのではないか・・・って。

「そう・・・なんだ。でも、どうしてあたしに・・・？」

そう聞いたとき、聖夜の顔が一瞬だけ曇ったのをあたしは見逃さなかった。だけど、次の瞬間には笑顔で・・・目を少しだけ細めながらも、しっかりとあたしを見据えていた。

「知ってほしかったんだ、俺のこと・・・。今はまだ、全部は言えないけど・・・それでも、少しでもいいから美羽に俺のこと知ってほしかった。後、知りたかったから。美羽のことを・・・もっと、もっと・・・。」

「聖夜・・・。」

・・・その言葉が、真っ直ぐにあたしの心の中に浸透していった。やっぱりどうあってもあたしは聖夜のことを好きなんだって、そう思った。正直、まだあの過去のことを言うのは怖いけど・・・でも。

「聖夜。あたしも聖夜のこともっと知りたい。だから、その日が来たら・・・教えてくれる？」

そっぴうと聖夜はともうれしそくに笑って・・・。

「うん。もちろん、そのつもりだよ。」

「せ、聖夜！ごめん・・・待たせちゃったかな・・・？」

「あ、美羽。おはよう。全然待つてないから、気にしないで。」

今日は美羽とのデートの約束があり、楽しみで楽しみで仕方がなく、実は30分前にはついてしまった。まあ、それは俺が勝手にやってしまったことだからね。少し申し訳なくしている美羽を見ると、ちよつとかわいそうになってきた。あ、でもそんなところも可愛くて大好きだけど。美羽のこういふところを見ると、つい虐めたくなくなってしまう。今日はあのいつも何故か湧いて出てくる邪魔者・・・海斗、だったけ？そいづもいないし。

「さ、行こうか。」

そついつてあくまで何気なく、自然に美羽と手を繋いだ。もちろん、恋人つなぎで。気づかれないようにそつと美羽の方を見てみたら、少しだけ頬を染めて俯いていた。いつものごとく、冷静なふりをして。

その姿に、俺の口元も自然とゆるんでしまう。自分の性格が悪いことは承知しているから何とも思わない。

「美羽はどこに行きたいところとかある？」

「ううん、特にないよ。」

「そっか。じゃあ俺の行きたいところとかでいいかな？」

そついう会話をしながら、俺も特に行きたいところとかはなかったんだけど・・・。そんな時ふと、本当になんともなかった。俺はもつと子供のころ、一度だけ美羽に会ったことがある。なんとなく美

羽に興味が出て話を聞いてみたんだけど、なんせ子供のころの話だからね。

ほとんど話の内容も覚えてないし、美羽もまだ口調とか結構拙くてよくわからなかった・・・でも、美羽にとってそれは人生を左右したとても深刻な事件だったってことだけはわかったんだ。

そしてその時俺も結構人生つてのに参ってたんだ。

そんな時俺よりも残酷で悲惨な人生を送ってきた美羽の話を聞いて・・・俺はなんて贅沢なことを思っていたんだろうって思ったことはきつと一生忘れない。『知りたい』って思った。美羽のことをもつと。

・・・その時からずっと。

「・・・ここ、は・・・？」

「ここはね、俺の父親が経営してる会社の一つだよ。」

美羽のことを知りたい・・・そのためには、まず俺のことも少しでも知ってもらわなければと思いここにやってきた。・・・あんまり言いたくなかったし、ここにも来たくはなかったけど・・・でも、これから本気で付き合っていくなら家のことは避けられない話題だろうし。それに・・・知ってほしいとも、思う。美羽に、俺のことだからここに来たんだ。そう改めて決意して美羽の方を見ると、なんだか混乱しているみたいだった。

ああ・・・そういえば・・・。。。

「美羽は気づいてなかったみたいだけど・・・俺は、和泉グループのトップの息子なんだよ。」

そう、和泉グループ・・・世界を代表しているといってもいいほどの大きな会社。今いるのはその子会社だけど・・・。美羽を見てい

ると、不意に美羽の表情が陰った。

「そう・・・なんだ。でも、どうしてあたしに・・・？」

この言葉には正直参ったな・・・。

恋人だから・・・何よりも大切な人だからに決まってるのに。やっぱり美羽は妙なところで鋭いくせに・・・鈍感だ。その鈍感さも可愛いとは思っただけど・・・やっぱり誤解されるのは嫌だから。

俺は伝えるよ。俺の気持ちを・・・。

「知ってほしかったんだ、俺のこと・・・。」

もっと。

「後、知りたかったから。美羽のことを・・・もっと、もっと・・・。」

誰よりも。知りたい。

「聖夜・・・。」

しばらく俯いていた美羽は、何かを決意したような瞳で俺をまっすぐに見上げてきた。

「聖夜。あたしも聖夜のこともっと知りたい。だから、その日が来たら・・・教えてくれる？」

・・・嬉しい。自然にそう思った。

「うん。もちろん、そのつもりだよ。」

美羽、愛してる。そういうと美羽は俺の期待を裏切ることなく真っ赤になった。いつもクールだけどこういうところが誰よりも可愛くて……一生離さないと、心に誓った。

「……なんか……す、すごいね……。」

部屋……というより大きな公共施設の中へと入った途端に、美羽は呆れともとれる感嘆のため息をこぼしながら、そういった。今俺たちがいるのは、さっきのところから車でおよそ30分程でついた、これまた和泉グループが経営している公共施設。それも遊園地やらプールやら……そんな思いっきり遊べるところもあれば、図書館やいろんな作品が飾られている部屋など……とにかく、ありとあらゆるものを寄せ集められた建物。とにかく馬鹿でかい。たまに俺の父親は、俺でも何がしたいのかわからないものを建てることがある。

これもそのうちの一つ。いろいろありすぎてもはや何がしたいのが分からない。

「まあ、ね……。」

俺は、美羽の建物を見た感想に苦笑いしか出てこなかった。まあ、誰が見てもだいたいこんな反応になるしね。因みにここへはタクシーで来た。なんとなくこのことを話してみたら、本当にそんなところなの？って顔されたからさ。そうになったら連れてくるしかないよね。

「美羽はなにかやりたいことはある？」

俺たちは建物内に設置してある、ベンチへと腰かけた。ここはさつきも言ったように、いろんなものが楽しめるようになっていて大勢できてもそれぞれが好きなどころで遊んだり休んだりできるためか、結構な人数の人で溢れかえっている。

「んゝ．．．聖夜は？」

「俺？俺は．．．。」

遊園地は前に偶然会って遊んだし．．．。まあ、ここはやっぱり。

「プールとか．．．かな？」

「えっ、でも水着．．．。」

「大丈夫。ここ、水着も販売してるから。」

「そ、そっか．．．。」

あ、照れてる。やっぱり可愛いなあ〜と思いながら、美羽の手を取って水着の販売場所へと歩き出した。

「お．．．大きいね．．．。」

「うん。その方が楽しめるからいいんじゃないかな？」

そうだね。と、苦笑する美羽。俺たちは今、ウォータースライダーの前に来ている。それも、まあ．．．そこら辺にはないだろうとて大きなやつの前。そのため頂上まで階段で登って行くのは大変だが、まあそれなりの価値はあると思う。現にそのウォータースライダーには、たくさんの人たちがいる。
まあそんなことは置いといて．．．。

「乗ってみる？」

「うん。楽しそうだね。」

そういつて美羽は笑顔を浮かべた。口元がいつもより少しだけゆるんでいるから、本当に楽しみなのだろう。そんな姿に俺も少しだけ顔を綻ばせながらも美羽の手を引いて、列の最後尾へと並んだ。並んでいる間も、美羽との会話は尽きない。美羽はほかの女の人達みたいに媚びたりしない・・・というか、むしろどっちかというと勇ましい・・・かな。だからかわからないけど、俺も自然体で話せるんだ。女の人で今までこういう風に話せる人っていなかったから、なんか新鮮。

因みに今の美羽の服装はもちろん水着。黒色のもので、ところどころにフリルやリボンが付いている。美羽の白い肌がいつもよりも際立っていて、なんというか・・・可愛いというより綺麗、という方がしっくりくる感じた。美羽は絶対に露出の少ないものがいいと言いつ張っていたので、そこまで露出はしていないのを選んだけど、あくまで『そこまで』だから。

やっぱり腕とか脚とかお腹あたりは出ているわけで・・・さつきからほかの男共がちらちら美羽の方を見ているのが煩わしいか思ったりして。

・・・美羽とは絶対に逸れないようにしなきゃな・・・。

「?・・・聖夜?どうしたの？」

「ううん。なんでもないよ。ちょっと考え事してただけだから。」

「そう、か・・・?」

そうついいながら首を傾げた美羽。ああ、やっぱり美羽は美羽だ。相変わらず妙なところで鋭いんだからさ。

「ま、気にしないで。それより、だいぶ近づいてきたね。」
「あ、本当だ。」

そして俺たちは、何分かした後やっと自分たちの番になり、ウォータースライダーを滑った。長時間並んだのに、滑るのはやっぱり一瞬と言っただけいいほど短く感じた。

「どうだった？」

「……ちょっと、怖かった……かな。」

その答えに、俺は苦笑した。確かにあの高さから滑り落ちるのは怖いだろう。……それに、あれは確かによほどの人じゃない限りトラウマになりそうだしね……。最初は本当にそこらへんにあるウォータースライダーと変わらなかったんだ。……本当に最初の少しの間だけだったけど。

ある地点に行くと思いつきり滑る速度が速くなり、それが収まったと思ったら次はジェットコースター並の速度で下に滑って……。というか、あれは落ちていくといった方があつてるかもしれないほどだった。

俺も滑ったことはなかったから、まさかここまでとは思わなかったよ……。

やっぱりああいうのって乗ってみたいと意外とわからないものなんだと、改めて思わされた。

「美羽、ちょっと休憩してからまた泳ごう？」

「うん。そうだね。」

よほど疲れてしまったのだろう。美羽はすぐに頷いた。そうして俺たちは、軽食が売ってある近くの空いているテーブル席へと腰を落ち着けた。

「大丈夫？」

「えっ？」

「さっきので結構疲れたでしょ？」

「ああ、うん・・・あれはさすがに疲れたかも。」

そっぴいながらさっきのウォーターライダーのことを思い出しているようだった。いろんな感情がごちゃまぜになったような顔をしている。まあそれも無理ない・・・かな。

実はあのウォーターライダーは、一人乗り用のものと二人乗り用のもので別れてて、俺は迷わず美羽の手を引いて二人乗り用の方へ行った。浮き輪は前後で座るところがあつて、美羽は前に俺は後ろの方に乗ったんだ。それは、乗ってる最中美羽を抱きしめていたから。

そんな思惑には気づかないまま、美羽は俺に勧められるままに前の方に乗ったんだけど、案の定後ろから覗き込んでみたら顔真っ赤にしてて・・・まあ、それもいきなり滑る速度が上がったためにあまりじっくり見れなかったんだけど。

・・・まあ、まだ時間はたくさんあるわけだし？
これから・・・だよな。

「・・・美羽じゃあまた今度。」

「うん。またね。」

あれからまた約3時間ほど美羽と遊んで、今俺たちは美羽の家の前

にいる。ここの家は何度見てもすごいと思う。いろんな意味で。ここには、何とか美羽を説得して、半ば強引にここまで送って行った。そして美羽は、家の・・・扉（玄関というよりこの表現の方が正しい・・・と思う）を開けよとする。だが俺は、その前に最後にもう一度だけ美羽にキスそこうかなと思ひ、美羽の腕へと手を伸ばした。他の奴への牽制もしたいし。特にあいつ（海斗）には。・・・だが、これはもはやお約束というやつなのか、やっぱり邪魔された。そんなお約束展開誰も望んでなんかいないのに。さっきから誰かの憎悪的視線を感じると思ったら、やっぱりこいつだ。本当に邪魔だなあ・・・。

「美羽ーっ！！！！！！」

そしてあいつが美羽に抱き着く・・・前に、俺はそいつを蹴とばした。冗談じゃない。誰が美羽に触れさせるものか。

「せ・・・聖夜・・・？」

「~~~~っ！！！！~~~~てめえ・・・なにしやがんだっ！！！！」

そうほざいている奴は一先ず無視をして、俺は美羽を自分の方に抱き寄せて・・・キスをした。それもとびっきりのやつを。そして、美羽から名残惜しく唇を離して沈黙すること約10秒。

「せっ！！せせせ聖夜っ！！？」

美羽は激しくどもりながらそういつて、最後には赤面して俯いた。可愛い。

「~~~~ってめえ~~~~っ！！！！」

そして先ほど美羽に抱き着こうとした馬鹿は、それだけ言っていきなり俺に殴りかかってきた。ほんとうざい。・・・しかも何気にこいつも腕が立つから尚更面倒な奴だ。いっそ今日の美羽と俺とのラブラブな1日でも大暴露してしまおうか。美羽にいきなり公衆の面前で(デイーブな)キスしたことや、プールの後何かと美羽を押し切って美羽の着せ替え楽しんだことや、いろいろギリギリな悪戯したこととか・・・。

・・・いや、なんかこいつに教えるのも癪だし、美羽に嫌われるのも嫌だしやめておこう。

まあそうしてなんやかんやでうるさい馬鹿を適当にあしらって、俺は美羽にまた会おうと言ってからその場を後にした。

「・・・いい加減出てきなよ。」

俺は美羽と別れた後、途中からずっと感じていた煩わしい視線の主にそういった。それに気づいたのは、美羽と別れて数分後。最初は気にせず歩いていただけ、こうずーっと見られているのはやっぱり気持ちが悪い。・・・それに、今回見逃して美羽に被害が行くのは絶対に避けたいしね。

「・・・お前・・・。」

そついいながら出てきたのは、こげ茶色の多分俺と同じくらいだろ
う青年。・・・どこかで見たことがあるような・・・無いような・・・
？

いや、それよりも。会っていきなり『お前』って・・・いくらなんでも失礼・・・あゝでも、こいつよりも失礼なのなんていくらでもいるか。会っていきなり襲ってくるやつとか。ほんと面倒。それでも力チンときたので、きっちり指摘してやる。ほんと最近の高校生って礼儀がなくてないよね。

・・・まあ俺も高校生だけど、そこは気にしないでいいこと。

「・・・君、誰？というか、いきなりお前呼ばわりはないんじゃないの？」

「・・・俺は・・・佐伯空。」

佐伯？

そつえば・・・俺の父親の秘書も佐伯だったような・・・ただの偶然か・・・？

「和泉聖夜。お前・・・いや、貴方は・・・あいつのなんなんだ？」
「あいつって誰？」

わざわざお前から貴方に言い換えたってことは、やっぱり秘書の佐伯の・・・息子だったことかな。それに、俺の正体も知ってるみただし・・・。

「・・・夜月・・・美羽。」

空は憎々しげにそう呟いた。・・・なんかこいつ海斗以上にウザったいんだけど。どうしよう。俺は掴み掛りそうになったのを必死で抑えて、表面上だけ笑顔で接した。

「・・・君さ、なんで俺にそんなこと聞くのかな？」
「知りたいから。」

今度は俺の目をみてまっすぐに。だけど鋭いその目の奥に宿るのは、
やはり嫉妬とかじゃなくて・・・憎しみだった。俺ではなく多分・
・美羽への。

やり直すことはできないけれど（前書き）

この範囲は空視点です。

やり直すことはできないけれど

最近、空の視線が今までよりも和らいだような気がする。まあ、今までよりも・・・なだけで、完全に消えたわけじゃないけど。あたしは何もしていないし、空が何かをしてきたわけでもない。空がここに転校してきてから数日、ろくに話したことさえもないのに・・・

・・・少しだけ、嫌な予感が過ぎった。

もしかしたらあたしの知らないところで、誰かを巻き込んでしまっていたのかもしれないとか・・・それがもし、あたしにとってかけがえのない大切な人だったら・・・とか。だってこんなにもいきなり変わるの、やっぱりおかしいと思う。

・・・いや、まだそうと決まったわけじゃない。

「考えすぎ・・・かな・・・」

「・・・？美羽？どうかした？」

「・・・えっ？あ、ううん。なんでもない。」

「？・・・そう？」

そうやって訝しげにあたしを見る樹。思わず呟いてしまった。やっぱり考え事は一人の時にするに限るよね。それに、マイナスに考えすぎだあたし。もしかしたらこのまま何もしてこないことも考えられるし、周りに別段変わった様子もないし・・・。

うん。とりあえず、もう少し様子見と行こうか。

「あ、あの！夜月さん！！」

「え。なんですか？」

考え事は一人の時にしようと思ったばかりなのに、また考え込んでしまったあたしに、突然クラスメイトの男の子が話しかけてきた。
・・・というか、勢いに驚いて敬語になっちゃったんだけど・・・まあ、気にしてないみたいだしいつか。

「えっと、佐伯が話したいことがあるって言うてるんだけど・・・。

」

「・・・わかった。場所は？」

「放課後、屋上でだつて。」

「そう。ありがとう。」

・・・やっぱりそんなゆづくりはさせてくれないよな・・・。でもなんでわざわざほかの人に伝えさせたんだ？あたしはそんなことを思いながら、放課後を待つことにした。

「樹、海斗。あたし用事あるから先に帰っててね。」

「ああ・・・例のあれ？うん。分かったよ。」

そして放課後。

あたしは屋上に行くことにした。このままでいてもどうしようもな

いから。樹や海斗にも迷惑はかけたくないから、先に帰ってもらうことにした。

「ええ！？なんでだよ！？なんの用事だ！？」

「いや・・・何のって言われても・・・。」

「俺は美羽と帰るぞ！？待ってるからな！！」

「いいからさつさと帰るよ！！」

「うわっ！！触んじゃねえよ！！」

海斗に否定されるのは想定内だったが、そこは何とか樹がまとめてくれた。あたしは海斗を引きずって帰って行く樹を見送った後、何段あるのか数えるのすら面倒になるような階段を上り、屋上へと向かった。

「やつとついた・・・。」

微妙に上がった息を整えて、ゆっくりと屋上のドアを開けると、一人佇む空の姿があった。他は見当たらないし空以外の気配も無いから、本当に話し合うだけなのだろう。まあどっちにしろ、少なくとも暴力とかはなさそう。そう思っただけで屋上へと踏み入れていくと、来たのに気が付いたらしい空がこっちを振り向いた。

「・・・やつと来たか。」

「うん・・・遅くなってごめん。」

遅くなってしまったのは本当なので、一応謝っておく。だけど空はあんまりそのことに関して、気にしてないみたいだった。それから数秒の沈黙の後、空が口を開いた。

「お前は・・・母さんの事、どう思ってる？」

「・・・・・・・・っえ・・・・・・・・」

正直言うと、驚いた。まさかこんな質問をされるとは思わなくて、心の準備ができていなかったから。

「どうって・・・・・・・・」

「憎んでるか？それとも・・・・・・・・」

「それとも・・・・・・・・あの時母さんを殺して・・・・・・・・満足した？」

あたしはその言葉に目を見開き、次の瞬間叫んでいた。

「そんなことない！！！！」

さすがに、その言葉は許せなかった。湧き上がる嫌悪と・・・・・・・・怒り。あたしが空を睨むと、空は負けじと睨み返してきた。

「なら、どう思ってる？」

「それはっ・・・・・・・・わからない。」

そう、分からない。憎んではない。・・・・・・・・でも、多分許してもいい。今まで、何も考えないようにしていた・・・・・・・・あたしの心の弱い部分が、もう考えるなと訴えかけてくる。

施設にいたころ・・・・・・・・ずっと夢に見た、悪夢。

『許さない』って・・・・・・・・あの人が・・・・・・・・お母さんが、ずっとずっとあたしに言ってくる夢。

それはまるで、呪いのように。

気が狂いそうなる程に・・・・・・・・延々と繰り返される言葉。

「・・・どうして、そんなこと聞くの。」

本当に、わからない。だってそんなことはなして何になる？あたしの胸の内を話したところで、空と分かり合えるとも思えない。・・・だって、空とあたしじゃ違いすぎる。生まれてきた時点で・・・すでにあたしには何の権利もなかった。いつだって・・・どんな時だって、あの家庭にあたしは存在していなかった・・・。

「前に・・・お前の彼氏だとかいうやつに会った。」

「え・・・そ、れって・・・。」

「和泉聖夜。・・・彼氏なんだろう？」

最悪の状況。巻き込んでしまった。あたしの知らないところで・・・何もできずに。誰よりも、巻き込みたくなんて無かった人を・・・。

ただ、憎みたかった。憎んでいたかった。・・・憎む対象が、欲しかった。あいつ・・・美羽が母さんを殺したのは、多分しょうがないことだった。だから正当防衛で美羽の罪は許されたんだ。

それは分かった。母さんが美羽に襲い掛かる姿もこの目で見たから。今でも鮮明に覚えているあの光景・・・。脳裏に焼き付いて離れなくて・・・夢の中でも何度も魘された。

子供のころの俺はただただ美羽を恨んでいるだけでよかったけれど・・・年を追うごとに、素直に恨むこともできなくなっていた。だってあの時はただ美羽の存在はその場にいるだけで汚らわしいもの

だと思っていたから。

今はあの時よりもたくさんの知識が増えて、それは間違っているんだと気が付いてしまったから。

・・・だから、無理やりにも美羽という恨む対象を作らなければ、心がどうにかなってしまいそうだった。・・・でも、和泉聖夜の話聞いてついにどうしたらいいか分からなくなったんだ。

・・・だから、

復讐しようと思ったのに。

未だできずにいるんだ・・・。

「・・・それで、」

美羽はしばらくの沈黙の後、どこか悲しそうな顔で俺に問いかけた。

「聖夜と・・・何話したの。」

そこには母さんを殺したとはとても思えない顔をした美羽の姿があった。その問いかけに、俺も答える・・・。

「それは・・・前の日曜日。お前と和泉聖夜が出かけていた日のことだ・・・。」

.....

「・・・君、さ・・・。なんで俺にそんなこと聞くのかな？」
「知りたいから。」

「・・・知りたい。今は・・・この時だけは、ただ純粹にそう思った。
・・・心の中では、決めつけていたのかもしれないけど。どう
せ自分の欲しい答えなんてこの目の前にいる人物・・・和泉聖夜が
知るわけないと。」

でも。それでも少しでも知っておきたかった。そうすれば・・・心
置きなく、美羽を潰せるかもしれないから。美羽一緒にいるやつが
まさか俺の父さんの会社の社長の息子だとは思わなかったけど・・・
。でも、これで美羽が何かを企んでいたとわかれれば・・・きつとた
めらいなんて無くなるかもしれない。

「・・・とりあえず、ここじゃなんだから・・・。」
「ああ・・・そうだな。」

そういつて案内されたのは、人が疎らにいる公園の端っこ。

「単刀直入に言うけど、美羽は俺の彼女だから・・・何かしたら許
さないよ。」

「・・・。。。」

何にも答えられなかった。彼女？あいつが・・・美羽が和泉グルー
プのトップの息子の・・・かの、じょ・・・。

「・・・逆に問うけど、」

「・・・なんだ。」

「君は美羽のなんなの？」

「……俺、は……。」

……家族？

それとも……双子……兄妹……？

どれもあっていて、どれも違う。だって俺と美羽は兄弟だけど……双子だけど。……生まれた時から、全く違う存在だったから。

家族であって、家族で無い。今は何とも言えないが……子供のころは俺にとっての美羽は他人よりも遠い存在だった。

……わからない。とても、とても複雑な関係……。

「……まあいいや。」

俺が口ごもっていたら和泉聖夜は聞き出すことを諦めたのか、少しだけため息を吐いてそうだった。正直それには助かった。本当にどういえばいいのか分からなかったから。

「それで、そんなこと聞いて君は何がしたいの？」

「……それを言ったらお前はどうするんだ？」

「愚問だね。さっきも言っただけど、美羽に何かしようとするんなら俺が許さない。……君が美羽になにかする前に止めてみせるよ。」

そっとう和泉聖夜は、ひどく真っ直ぐな目をしていて。その目からは、彼が本気であることを物語っている。

「……俺は、最初はいいつを潰すつもりでいた。」

「どうして？」

「……あいつが、俺の人生を台無しにしたから。」

……これは、子供の頃の意見。でもそう思うのは『被害者側』の

人にとっては正当な言い分だと思う。・・・そして俺は『被害者側』にいるんだ。美羽は・・・『加害者』つまり、決して許してはいけない、敵。子供のころは本心からそう思っていたこと。俺はこの想いをそう簡単に変えることはできなかった。だけどこの目の前の男は、それを否定するような言葉を吐いてきた。

「本当に？」

「・・・どういうことだ。」

「俺には、美羽がそんなことするような人間には見えないけど。」

「・・・まあ。そう思うだろうな。あれは、見方によってはただの事故。どうしようもない、現実。」

母さんも父さんも、もちろん俺も・・・美羽も。本当は誰もあななることを望んでなんかいなかった。

なら、本当に憎むべきは・・・きっと、俺や美羽が生まれる前母さんを襲った・・・

くろかわよりひと
黒川頼人

調べて分かった。これが、母さんを襲った奴の名前。・・・それでも、名前だけわかっててもどうしようもなかった。どこにいるかは分からなかった。だから、すぐに居場所が分かった美羽を潰そうと思っただ。

「お前は・・・美羽のことをどう思ってる？」

その問いに、和泉聖夜は迷うことなく答えていった。

「好きだから。それに、君よりも美羽の方がつらい思いしてきたと思うよ。」

「・・・お前は、あいつの過去を知ってるのか。」

「うん。といつても、もつと子供のころに聞いた話だからそこまではつきりとは覚えてないけど。・・・それでも、どれだけ辛い思いをしてきたのかだけはわかる。たくさん悩んで苦しんで悲しんで・・・それこそ、君の悲しみの比じゃないくらいに。それでも美羽は君とは違って前に進もうとしているんだよ。頑張ってその日その日を生きているんだよ。」

君は知らないよね。俺が初めて会った美羽は最初笑いかけてすらくれなかった。そこに、感情はないみたいに話してた美羽を。・・・話していくうちに徐々に感情だつて見せてくれるようになったけど、初めて笑ってくれた顔だつて、すごくぎこちないもので・・・。」

その話を聞いたとき、美羽の心を救ったのはきつとこの目の前にいる人物なのだろうと思った。

・・・俺は、見ようともしていなかったから。まだ家庭が壊れていなかった時の美羽の顔なんて思い出せない。

ただ、日を追うごとに話さなくなっていく美羽だけは覚えていた。

「それなのに、やっと心から笑ってくれるようになったのに・・・そんな美羽の邪魔をするなら許さない。」

このとき俺は、美羽に復讐しようなんて思う心はほとんどなくなっていた。・・・それはきつと、俺が想像していた以上に・・・美羽が充分すぎるくらいに苦しんでいたことが分かったから。

「・・・でも、それでもまだ完全に憎む心をなくせはしなかった。だから今度は和泉聖夜でも、お前の周りの人間でもなく・・・。お前自身に。」

「・・・・・・・・。」

知らなかった。聖夜に迷惑かけちゃったな・・・。でも・・・それでも嬉しいと思う心を抑えきれなかった。

「あたしはあの人を・・・空たちだって憎んでなんかいない。」

この感情はきつと、聖夜が教えてくれたものだ。あの頃あたしにとつて神様みたいな存在だった聖夜が、まるですべてを許すともいうような言葉と共に、贈ってくれたものだ。

・・・だから、今のあたしがここにいます。

「確かに、あたしがしたことは空たちにとって許せることではないのかもしれない。・・・憎んでいても、それが当たり前前の反応だと思う。でも・・・。」

それでも、もしも・・・

「もしもあたしを許してくれるのなら、・・・友達になってくれる？」

もう、家族にはどうしても戻れないから。だからあたしは戻るよりも・・・前に進みたい。

・・・こんな関係のまま終わるのは、嫌だ。

そう思って真っ直ぐ空を見つめると、しばらくして空の瞳から憎しみの色が消えた。そして次に、フツと笑う。

あ・・・・・・・・。

初めて、笑ってくれた。

「ああ・・・そうだな。」

それは心からの笑みではなく、少し自嘲しているようなものだったけど。少し、ほんの少しだけ・・・前に進めた気がした・・・・。

温泉旅館

あの日を境に決意した。

『ずっと・・・ずっとそばにいるから』

だから泣かないで。
悲しまないで。

・・・笑っていて・・・

・・・きつといつか、あの人のことも忘れることができるから。

「いい天気だなー。」

「そうだね。」

「美羽寒くねえか？なんなら俺が温めてあげようか？」

「いやいい。」

「そうだよ。馴れ馴れしく美羽に触らないでくれる？」

「・・・なあ、なんでこんな奴まで連れて来たんだ・・・？」

「多い方が楽しいでしょ。」

空との一件から数日が経った。ここはバスの中。向かっている先は・
・旅館。そう。あたしたちは今、温泉旅館へ行く途中だ。人数は
あたしと海斗と聖夜と樹・・あと、空も入れて計五人。なぜいき
なりこんな話になったかというと、樹の親がくじかなんかで当たっ
たかららしい。まあその肝心の樹の両親は仕事で来れなかったみた
いけど。

「はああ・・・俺は美羽と二人きりできたかったのに・・・。」

「そんなこと私がさせるわけないでしょ。私だって本当は美羽と楽
しく来たかったわよ。」

「あはは・・・。」

海斗と樹のいつまでも変わらないやりとりに、どこか安心している
あたしがいた。空と話した後、ぎこちなくもあたしと空は次第に打
ち解けていった。そのことを思い出してふっと笑っていると、隣に
引き寄せられた。

「ところで美羽。何もされなかった？」

「え？・・・ああ、うん。何もなかったよ・・・巻き込んだじゃって
ごめんね。」

「ううん。そんなこと言わないで。何にもなくてよかった。」

そんなことを言いながら微笑みあうあたしと聖夜。いつまでもこの
ままでいられたらなあと思った。

それから何十分かした後、漸く目的地へとついた。

「美羽、いこー！」

「うん。」

「うわあ、結構大きいね。」

「・・・だね。」

・・・何故だろう。前に聖夜の親の会社だか何だかを見ていたからか、そこまで感動がない……。うん。これは駄目だな。人間感動する心を失くしたら終わりだと思う。

「何ボーっとしてるんだ。・・・早くいくぞ。」

「あ、うん。」

そういつて空に腕を引っ張られた。これは空と打ち解けてから分かったことだけど、空はぶっきらぼうで自己中心的な言葉遣いとは裏腹に、意外と面倒見がよくて触れてくるその手からは少なからず優しさが伝わってくる。

「てめっ、おい空！美羽を離せよっー！」

「黙れ。」

・・・本当。この言葉遣いさえ直せば誰とでも上手くやっていけそうな気がするんだけどな……。まあそれは置いて、とりあえず皆で旅館の中へと入った。

「広ーいっー！」

「だな。それに意外と綺麗だし。」

樹と海斗の言うとおり、旅館の中は上品で落ち着いているけれど明るさも損なわず、和に少しだけ洋が組み合わさった感じの内装だった。それにこの旅館は結構古いはずなのに、とても綺麗な。ここなら落ち着いて過ごせそうだな。

そしてなん分かった後、あたしたちは漸く部屋の前へとついた。部屋は二つ。因みに隣どうし。女と男でわかるつもり。というかそれはもう決定だな。当然。誰が何と言おうとそこだけは譲るつもりはない。

樹が、フロントにて鍵を持ってきてくれたので、あたしたちはさっそく中へと入る。部屋にはリビングらしき場所があって、そこからは庭に行けるらしい。やっぱりこの旅館はいいかも。結構広いし。

「わあ、綺麗な部屋だね。」

「そうだね。・・・ところで、これからどうする？もうそろそろ昼だけど。」

「あ、ほんとだ。んーじゃあ、とりあえずお昼ご飯食べにいこ！」

「分かった。んじゃ、皆呼んでくるね。」

「あ、私も行く！ちよつと待ってて。」

そついいながら樹は急いで荷物整理をした。どんだけ持ってきているんだか。

「お待たせー！！」

「うん。じゃあ行こう。」

「だね。」

時刻はちょうど正午。昼食の時間としてはいいだろう。あ、でも夜はコース料理らしいからあんまり食べない方がいいかな。そんな

ことを思いながら、他の三人がいる隣の部屋へと行く。

「皆、昼ごはん食べに行かない？」

そういいながら、樹がドアを開けた。おーここも広いな。男性用にいるのか、あたしと樹の部屋よりも落ち着いた雰囲気だ。

「あ、美羽。んーそういえばもうそんな時間かあ。」

「うん。夜はコースらしいから、喫茶店とかそら辺の軽い感じのところにしようと思ってるんだけど、聖夜たちはどうする？」

「ああ、そうだね。そうしよつか。」

「じゃあ、皆行くよー!!」

樹のそんな掛け声とともに、皆そろそろと腰を上げて簡単に用意をする。所要時間約3分。さすが男子、早い。

そしてあたし達は長い廊下を渡り旅館の外に出た。

「近くに何かないかなー。」

「もう少し歩いた先に、いろんな店があるらしいぞ。」

海斗の言うとおり、少し歩いた先に商店街のようにいろいろな店が並んである通りがあった。周りにそこまで店がないせいか、思っていたよりも人が多い。

「あ、ねえ美羽っ！あそこは？」

「ん？」

突然樹が腕を引っ張ってそういつてきたので、どこかいいたところが見つかったのかと樹が指をさした方向を見てみるとそこは……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4030y/>

極道と暴走族

2011年11月26日19時58分発行